
紅蓮の騎士の波乱の高校生活！？

A I R S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅蓮の騎士の波乱の高校生活!?

【Nコード】

N5538T

【作者名】

AIRS

【あらすじ】

ある世界を救ってとある騎士がその世界から消えた。

やがてその騎士はある人物に出会い、新たな物語がスタートした…

……………その舞台とは……………高校!?

この小説は主に作者の思いつきと、皆様のご協力によって成り立っております。なので読者の皆様が楽しんでいただければ幸いです。

◇第1話「人生って何が起こるか分からないから人生なんだよね」(前書き)

◇第1話「人生って何が起こるか分からないから人生なんだよね」

??? side

「……………どういふ状況なの？」

今の状況を完結に説明しようと思っても、上手く言葉で説明するのは難しいだろう。

何せ、暗闇の中でいきなり光が現れたかと思うと突然一枚の紙切れが出てきてどこからか『ワシの声が聞こえるか?』なんと言ふ声が聞こえてきた。

無論あたりに人がいる様子はない。

強いて言うなら、一枚の紙切れがあるだけだ。

「もしかして……………これ?」

不思議そうに紙を指差すと、突然紙が起き上がった。

「おう、ワシの声が聞こえるのか!？」

紙が奇妙な動きをしながらしゃべっている。

大きさはA4くらいで真っ白だ。

いったいどこからしゃべっているの皆目検討も付かない。

「よかったわい、聞こえなかったらどうしようかと思ったからの」

「とりあえず、あなたは誰ですか……………?」

恐る恐る質問してみると……………

「神じゃよ」

「……………そうですね。紙ですよ」

「おお!! ワシが神じゃと分かるとはさすがじゃ!!」

「いえ……………見たまんまなんですけど……………」

「ん?……………と言う事は、そちらでのワシの姿はどう見えているんじゃない?」

どうやら声の主は自分がどんな姿か分からないらしい。

「どうって……………A4の紙ですね」

「何じゃと!?! “カミ” 違いか!?!」

上手い事言ったけど……………それでは何の解決にもなっていない。

すると、その紙は急に動き出して、折り紙の様に折りたたみ始めた。そしてしばらくすると

「これで、何とかなったじゃろ」

折りたたまった紙は今度は人の形をして少し大きさも大きくなったようだった。

「でも、紙は紙ですよね……………」

「……………さて本題に入るかの、神谷光司」

「ッ!？」

僕の話がスルーされたことよりも、向こうが僕のことを知っていることに驚いた。

ただの紙ではなく、どうやら神というのはあながち嘘ではないようだ。

「驚いているようじゃな。まあ無理もない……………さて本題じゃが」

「……………」

「お前には……………まだ生きてもらわねばならん」

「……………と言うと？」

「うむ、お前の命の寿命はまだまだあるのでな。今死んでもらうと、非常に面倒なんじゃ。主にワシが」

「……………で、今はどういう状況なんです

か？」

僕は少し神に幻滅し、ぶっきらぼうに聞いてみた。

「いま、お前は死と生の狭間におる。そして、元の世界に戻すには時間がかかるんじゃない。それにここに長くいると生でも死でもない世界に一生いることになる。そこでワシはいい方法を思いついた」

「……………（ゴクッ）」

「お前にはしばらくの間……………高校に通ってもらう！！」

「……………は？」

そういった途端、あたり一面光に包まれ僕の意識は薄れていった。

光
side out

三人称 side

ここはある町のある家の前。

そんな家の前に、突然眩しい光が現れ1人の人間がそこから現れた。
見るとボロボロの格好で血が滲んでいた。

息もしているのか分からないほど衰弱していたが、それでも生きていた。

すると、光に気が付いたのか1人の少女が家の玄関を開けて出てきた。

「いったい何が………ッ!? 人が倒れてる!!」

たまたま医学の知識があつた彼女はすぐに状況を把握し手当てをするため家に運び込んだ。

そしてこの出会いが、両者を波乱の生活へと導くのであった。

三人称 side out

光司 side

紙（神）から突然何かを言い渡されたかと思うと、僕は意識を失った。

そしてしばらくすると、意識と共に体の感覚も戻ってきた。

体の感覚が戻ってきたかと思うと、急に体の激痛のせいで目が覚めて僕は起き上がった。

「痛ッ！！……………ここは？」

辺りを見渡すと、どうやら誰かの部屋のようにだ。

綺麗に整頓された家具や雑貨が目に入る……………どれもかわいものばかりだ。

「……………と言う事は、ここは女性の部屋なのかな……………?」

僕が1人呟くと、扉を開けて1人の女性が入ってきた。

その女性は長い青髪をポニーテールにしてエプロンをしていた。手に持っていた料理から察するに、さっきまで料理をしていたようだ。

「あなた、もう起きて大丈夫なの!? ずいぶんひどい傷だったけど……………」

「ああ……………はい、何とか……………ッ!」

起き上がろうとしたところ、再び痛みが走りベットに埋もれた。

体をよく見てみると的確に包帯が巻かれていて、一切無駄のない巻

き方だった。

「あなたが僕を……………?」

「うん。家の前に倒れてたから放っておけなくてね。それにしても、どうしたのあなた? 名前は? どこから来たか分かる?」

彼女は料理を近くのテーブルにおいてベットの近くにあった椅子に腰掛け、僕に質問した。

この時僕は正直困った。

本当のことを言うべきなのかどうか……………

僕がどうしようかと悩んでいると

「美華、どうだった……………ああ、気が付いたのね?」

今度は同じ青い髪で、その人の母親らしき人物が顔を出した。

それにしても、ずいぶん若い気が……………

先程の女性は、僕より少し年下くらいだと思うからだいたい高校生くらい。

しかし母方の方はどんなに多く見積もっても30代前半くらいにしか見えない。

すると、17歳で子供を産んだことになってしまう。

どう考えても計算が合わない……………

「どうしたの？私の顔に何か付いてる？」

「い、いいえ……………」

「それより、名前はなんて言うの？」

美華と呼ばれた女性に促され、名前は名乗っておく事にした。

「神谷……………神谷光司です」

僕がそう言うと、2人は面を食らったような顔をしてお互いを見てからもう一度こちらを見た。

.....やっぱり、アレかな.....

「『男なの!?!』」

やはりそうだった。

たいてい初めて会った人には勘違いされる。
いったいどうしてだろうか.....

「はい.....一応男です.....」

「そっか.....どうりで包帯巻いたとき胸がなかったんだね」

「.....ん？」

咄嗟に僕は体をもう一度見る。
体中包帯だらけ.....身に着けている衣服はパンツくらい

だ。

と言う事は……………

「ッ／／／／／……………」

僕は急になんだか恥ずかしくなってきた。

助けられたとは言え、見知らぬ人にほぼ裸を見られてしまった……
……………

お嬢にいけない／／

「でも……………完全に反応は女の子ね……………」

「そうね……………」

※こういうこともあって、女性に勘違いされることは無くならないのであるb y作者

「そういえば、自己紹介がまだだったわね。私は藍野美華あおのみかよろしくね」

「母の麗華れいかです。えっと………神谷君は、この辺りの人かしら？」

「いえ………、実は、自分の名前以外思いつけないんです………すみません」

僕はとりあえず、記憶喪失と言う事にしておいた。

ここがどこなのかも分からないし、魔法のことも言って良いかどうか分からない。

とにかく、今は状況を冷静に把握する方が先決だ。

「そっか………記憶喪失か。まあ、あれだけの怪我を負ったのは気になるけど仕方ないね、記憶が戻ったらまた話してもらおうかな」

「すみません……………」

「いいのいいの。無理に思い出さなくても、ゆっくり思い出してね。それまで家で生活してもかまわないから」

「はぁ……………は？」

僕は一瞬耳を疑った。

今“家で生活してもかまわない”と聞こえたんですが……………

気のせいですよね

まさかさっき知り合ったばかりの人間と一緒に生活するなんて……………

……………

「そうね。家は男手もないし、最近は物騒だからね。いてもらった方が何かと助かるわね」

麗華さん、反対するどころかすごく賛成してる……………

……って、ちょっと待った!!

「いいんですか!? 見ず知らずの人間を一つ屋根の下にッ!! いったっ!!」

僕は2人の言動に驚いて再び飛び起きてしまうが、大声を出したためか最後までいえなかった。

「大丈夫よ。部屋はまだあるし、困った時はお互い様よ」

「そうそう。光司君、確かに私と同じくらいで、その年代の男性は著しく女性に対する興味が活発になるって言うけど、光司君はそんな事しないとおもうから。それに……」

そう言うと、美華さんは徐に……

「はぁ!!!!」

「ッ!?!」

拳を前に突き出し僕の顔の目で前で止めてみせた。

僕は目をパチクリさせ恐る恐る美華さんの方に視線を向けた。

その顔は恐ろしく笑顔だった。

(たぶん、怒らせると一番怖いタイプかも……………)

「その時は、容赦なくこの拳をお見舞いするからね♪」

「は、はい……………覚えておきます……………」

こうして、僕は藍野家でお世話になる事となった。

これからどうなるんだろうか……………あの紙(神)の言葉も気になるし……………前途多難だ。

◇第1話「人生って何が起こるか分からないから人生なんだよね」(後書き)

A「さて、いよいよ始まりましたこの小説“紅蓮の騎士の波乱の高校生活!?”はたして今後どんな展開が待っているのでしょうか!?”」

光「楽しそうだね……………」

A「おっと、君は最近出番の無かった光司君ではいか!!”」

光「ではなか……………じゃないでしょ!!”いきなり何なのこの展開は!?”1話から早くも居候になってるじゃないか!?”」

A「まあ、そうした方があとあと便利かな……、なんて」

光「そんな理由で……………」

A「心配するな、まだまだ君の高校生活は始まってもいないじゃないか!!”始まったらもっと面白くなるぞ!!”」

光「僕は普通の高校生活を送りたいよ!!”」

A「それは無理!”それでは次回もお楽しみください!!”」

◇第2話「キャラ設定」

一応キャラ設定です。

これから増えていくと思いますのでどうかよろしくお願いします。

○名前

藍野^{あおの}美華^{みか}

○年齢

17歳

○身長／体重

160cm／
51kg

○容姿

名字の通り藍と青の間のような綺麗な髪が特徴。腰の辺りまで伸ばしており普段はポニーテールにしている。
目の色は茶色で、おしとやかな雰囲気がある。

○詳細

見た目とは違って大らかな性格。医者を目指しているだけあって勉強はもちろん、怪我の治療もお手の物。さらに空手の有段者ともあってかなり強く、おまけにスタイルもよい。困っている人を見るとつい助けたくなくなってしまいう優しい心の持ち主なのだが、少し心配性なのがたまにきず。でも、怒らせると手を付けられないほど怖い……
………ちなみに、苦手なものは幽霊など心霊系のたぐい。

○名前

あおの れいか
藍野麗華

○年齢

3○↑この丸はゼロではありません

○身長／体重

154cm／ピー？

○容姿

美華と同じ色の髪で、肩の辺りまで伸ばしウェーブが掛かった髪形。少しおっとりした感じの女性である。

○詳細

美華の母親で、若くして美華を産んで早くに夫をなくして以来一人で育ててきた。娘同様スタイルがよく、見た目はおっとりしているが中身はしっかりしていて1人で何でもこなす。しかし料理だけは苦手で、料理は美華が作っている。たいていのことは受け止めるほどの器量のよさで、家に光司の居候を許可したほど。好きなことはかわいい服を娘（誰でも可）に着せる事。

○容姿

150cm／
51kg

○身長／体重

18歳

○年齢

上野^{カミノ}
圭^{ケイ}

○名前

髪は黒だが少し赤っぽく、腰まで届く長さのロングストレートでいつも赤いカチューシャを付けて前髪を上げており、カチューシャを外すと両目とも隠れてしまうほど。何気に顔は美人系。

○詳細

基本的に明るいムードメーカーな存在で、モラルのある真面目な人。留年しているためクラスメートよりも年上だが、光司達との仲もあり全く問題無くクラスに馴染んでいる。勉強は苦手だが嫌いではないと言う曖昧な認識。出来るものとはとん出来るが、出来ないものはとん出来ない。

○名前
そうは ゆうと
蒼波優斗

○年齢

17歳

○身長／体重

178 cm / 64 kg

○容姿

黒髪で首の後ろまで髪を伸ばしている。瞳の色は青で、整った顔立ちのため男子女子共に人気がある。

○詳細

美華の男友達でありクラスメート、美華とは高校1年の時に知り合ったため今でも話すほうである。

部活、スポーツ等はないが身体能力は一般以上のため、同級生の部活動所属の面々に助っ人をよく頼まれる。そのためほとんどの部活で彼の名を知らないものはいない。

○名前

かみやうびき
神迫響

○年齢

17歳

○身長／体重

162cm／58kg

○容姿

肩にかかる程度の黒髪に、血のような赤い瞳をしている。誠実そうな顔で、隠れファンがいるとかいないとか………

○詳細

優斗と同じく、1年から美華のクラスメイトで優斗との仲もいい。学業は優秀で校内で10位以内の実力者だが、運動が苦手な一面も。時たま真顔で冗談を言うため、冗談に聞こえたことがない。

○名前

姫麴桜誇
ひめくさくらほり

○年齢

17歳

○身長／体重

159cm／ピー？

○容姿

腰まで伸ばした深緑色のロングヘアーに、澄んだ緑色の瞳の少女。
その美貌は学校でも噂になるほどのもので、かなりの男子生徒が告白したほど。

○詳細

仕草の通り、姫薹財閥のお嬢様でけっこうなお金持ち。どれくらいお金持ちなのかと言うと、資産を見ると顎がしまらない程。だがそれを鼻にかけないところも彼女の手柄の良さだろう。美華、優斗、響と同じく1年の時から一緒に仲がよい。

○名前

近藤 勲
こへい けん

○年齢

17歳

○身長／体重

180cm／70?

○容姿

某○魂の近藤をもう少し若くした感じ。

○詳細

見た目は高校、頭脳は高校以下それと言うダメダメな男。だがクラスの行事ごとだけは真面目に取り組むと言うどこか憎めないやつ。普段やることは寝る事とエロスを求める事。

◇第3話「いよいよ始まる新しい生活………なんだけど、こんな日常あり

まず始めに、オリキャラを送っていただいた天照大神さん、鮮血の
刻印さん、夜神さん、eagleさん、暇人さん、本当にありがと
うございました！！！

この回で一応全員出ておりますので、口調など何か変なところがあ
りましたら遠慮なく言ってください。

それではどうぞ……！！

◇第3話「いよいよ始まる新しい生活………なんだけど、こんな日常あり

光司 side

藍野家での生活が始まって早一週間。

僕の怪我也ほとんど完治し普通に生活を送れるまでになっていた。

そしてここに来て分かったことがけっこうあった。

まず1つは魔法の存在。

これは僕が思っていた通り存在しないことがザックスの調べで分かった。ちなみにザックスによると、向こうの世界で魔力をかなり消費したため、僕の魔力はこっちの世界で回復するには時間がかかるらしい。

まあ魔力なんて早々使わないからいいんだけどね。

2つ目は、今の時季は3月だと言うこと。

つまりは春休みなので、美華さんも麗華さんも家にいてけっこう親しくなれた。

怪我の治療のお礼に得意な料理を振る舞うと、『ぜひとも家にいて
!!!』なんて言われてしまい最近では僕が料理を作ることが多く
なっていました。

所謂一宿一飯の恩義と言うやつだ。

そして3つ目、これが一番驚いた。

それは……………

「何で若返っているのかな……………?」

そう、3つ目の分かった事は僕自信が若返っていることだった。

ザックスに確かめたところ、17歳の時の僕と今の僕の肉体構造や
体の状態などが一致しているらしい。

なので、僕の身長も少し縮んで166ぐらいになった。

「これからどうなっちゃうんだろう、僕……………」

僕がため息混じりに呟くと

「光司君!! ちょっと来て!!!」

「ちよっ、み、美華さん!?!」

突然部屋に入ってきた美華さんに連れられ、僕は1つの部屋に連れてこられた。

そこには麗華さんもいて、机の上には一枚の紙が置いてあった。

まさか……………あの紙(神)じゃないよね?

そう思いつつ、僕は机を挟みその場に座る。

そして美華さんも僕の隣に座った。

「光司君、突然で申し訳ないんだけど……………」

そう言って麗華さんは机の上の紙を差し出した。
その紙には、“入学案内”と書かれていた。

「こ、これは……………」

「実はね、光司君の記憶が戻る間だけでもここに通ってみないか、
って話が美華と出たの。急な話で驚いたかもしれないけど、どうか
しら？」

「今の光司君は右も左も分からない状態だけど、学校に通ってる家
に友達も出来て、そのうちに記憶も思い出すと思うの。どうかな？」

2人に薦められ、僕は咄嗟にあることを思い出した。

（そうか！！……………紙（神）が言っていたのはこの事だったの
か……………）

僕はしばらく考えて、1つの答えを出した。

「……………そうですね。確かに2人の言う通りかもしれませんがね……………僕、学校へ行ってみます!!」

結論として、僕は学校に行くことにした。

本音を言うと、高校に行かなかったから興味もあったりもする。

「良かったわ。入学手続きはこちらでやるから、4月からはれて高校生ね。美華も同じ高校だから、困ったときは助けてくれると思うわ」

「そうそう。そんなわけで、学校でもよろしくね光司君!」

かくして、僕は高校生になるのだった。

光司 side out

三人称 s i d e

時間はあっという間に過ぎ去り季節は春。

今日、光司が入学することとなったここ青春高校では入学式が執り行われた。

ちなみに、どうしてこの高校の名前が“青春高校”と言うのかというと、高校曰く『だって高校といえば青春じゃん』だかららしい……それで良いのか校長。

入学式も、滞り無く行われ式はあっという間に終わった。

と言っても、光司は2年に転入するため式が終わるまで学校の外で待っていた。

「はあ、なんだかこうしていると不良みたいだな……………」

そして、体育館から生徒達が出て行ったのを見計らって光司が職員室へ向かおうとすると

「ん……………あの人も転入生なのかな？」

ふと見ると、たった今校門をくぐってきた生徒が見えた。

その歩き方と制服を着崩している事から光司は最初不良では無いかと思った。

（見た目で人をあんまり判断したく無いけど……………話
し掛け辛いな。制服を着てるって事はこの生徒みたいだし、また
話す機会もあるかな）

そう思い、彼は職員室へと足を急いだ。

「ああ……………寝坊しちゃった……………」

そんな独り言など、聞こえないくらいに。

職員室に来た光司はまず教職員に自己紹介をした。

先生達も光司に暖かい拍手を送り、転入を歓迎しているようだった。

そんなこんなで教室の前までやってきた光司。

担任はどうやら女の先生でけっこう若い。

去年1年生を担当して次は2年生、と言った所だろうか。

「何だか緊張するな……………」

「大丈夫よ。ここの生徒はみんな良い子ばかりだからすぐに仲良くなれるわ」

ここで先生の容姿について説明しておく、髪はピンク色よりもっと赤めの色で長い髪を後ろで1つにまとめている。顔は優しそうな表情でメガネをかけている。

そして若干メガネが下にずれている。

(言った方がいいのかな……………?)

言おうか言うまいか悩む光司。

だが、それも意味をなさなくなる……………

「それじゃあ、私が合図をしたら入ってきてね」

そう言いながら教室のドアを開ける。

すると

コテッ

「あいたっ！」

先生が振り向いた瞬簡に上から黒板けしが落ちてきて先生の頭上にヒット。

その衝撃でメガネが完全にずれてしまった。

「もう！！いったい誰ですか、こんないたずらをしたのは！？」

「先生、いつも道理近藤君がやりました」

「おいっ！言うなって言っただろ！！」

「はぁ、近藤君、いい加減こういう子供染みたいたずらは止めな

さいいて言ったでしょ」

「す……………すいません……………」

近藤少年のいつものいたずらによって和やかな雰囲気をかもし出したクラス。

しかし、いつもいつも引かかっている先生も先生である。

「さて、それじゃあこのクラスは去年と同じで私、みやはら みずほ宮原瑞穂が担任をします。みんな、また一年宜しくね」

「『『『は〜〜〜い』『』『』』」

「さてみんなも知っての通り、このクラスに新しい仲間が加わります!!」

瑞穂の言葉に驚きを隠せない生徒達。

転入生が来るという噂はあったもののこのクラスとは想像していなかったようだ。

「みんな静かに!!……………入ってきて」

ガラッ、という扉の音と共に1人の男が教室へと入ってきた。

三人称 side out

美華 side

瑞穂先生の挨拶が終わると、先生の合図で光司君が教室へ入ってきた。

いつもより堅い歩き方ってことは………やっぱり緊張してるみたいね。

すると、私の後ろにいた子が話しかけてきた。

このクラスはほとんどが去年と同じ面子だけど、ちらほらみない顔もいた。

さっき話しかけてきた子もその一人だった。

赤黒いきれいな髪を腰まで伸ばした少し美人系の女の子。

「あの子何だか女の子っぽくない？」

「まあ、最初見たときはそう思うけど……………一応は男の子らしいよ」

「って、その言い方だとすでに会ってるみたいね？」

「うん、ちょっとね。えっと……………」

「名前がまだだったわね。あたしは上野圭、かみのけいよろしくね」

「私は藍野美華。よろしくね、上野さん」

「圭でいいわよ。そう呼ばれてたし」

「そうなんだ。だったら私も美華でいいわ」

「分かったわ。よろしくね美華！」

と、私が圭ちゃんと話していると光司君の自己紹介が終わったように恒例の質問タイムが始まった。

「趣味は何ですか？」

「趣味は料理です。味の方は………若干の自身があります」

おおおお！！という声がクラスから沸き起こった。

確かに、あの料理はそうとうなものだったものね。

「男ですか？それとも女ですか？」

「……………男です。はい、本当に男です」

やっぱりこの質問が来たわね。

まあ最初は私も思ったんだけど……………

「彼女はいますか!？」

「……………いません／＼／」

「女子の制服着てみませんか!？」

「……………えええ／＼!！」

何だか質問が個人的になってきたわ……………

「はいはいそこまで。神谷君も全部真面目に答えなくてもいいのよ」

「は、はあ／＼……………」

光司君、緊張と質問のせいで赤くなってるわね。

そういう所は本当に女の子っぽいんだから。

「それじゃあ、神谷君はその席ね」

「はい、分かりました」

そして光司君は私の隣の席に座った。

美華 s i d e o u t

光司 s i d e

質問タイムと1時間目が終わり、やっと休み時間になった。

質問攻めにあってこんなに疲れるなんて……………

「はあ〜」

「どうしたの？ そんなため息ついて。よっぽど疲れちゃった？」

「はい……………あれ？その人たちは？」

僕がふと顔を上げると美香さんのほかに数人の男女が集まっていた

「ああ、紹介しとくね。私の友達」

すると美華さんの右隣の人から自己紹介を始めた。

「始めまして、上野圭よ。実を言うと、私は美華とさっき友達になったばかりだけど。得意なのは国語と社会と音楽、これは誰にも負けないわ。そんなわけで、これからよろしく神谷君！！」

小柄で、黒いが少し赤っぽくて長い髪の少女がまず初めに自己紹介をしてくれた。

カチューシャでたくし上げた整った顔が印象的だ。

「うん、よろしく上野さん」

その右隣を見ると、今度は黒髪を少し伸ばした男子が自己紹介をしてくれた。

「俺は蒼波優斗^{そうは ゆうと}。美華とは1年の時から同じクラスだ。で、何かと気が合うんで今じゃ大事な友達の1人だ。得意なことは………
：運動かな。たまに運動部の助っ人なんかもやってる。まあ、これから仲良くやっていこうぜ、神谷!!」

「こちらこそ、よろしく蒼波」

「次は俺かな。俺は神迫響^{かみさ いびき}。優斗と同じで1年からのクラスにいる。まあ勉強は普通だけど、優斗と違って運動はちょっと苦手かな。それじゃあよろしく神谷君」

次に自己紹介をしたのは黒髪を肩まで伸ばした子。
特徴的なのは血のような色の赤い目だ。

「よろしく、神迫」

そして最後にもう1人いた。

綺麗な緑色のロングヘアーに同じく澄んだ緑色の目。
そしてその仕草はどこかのお嬢様を思わせるようだった。

「はじめまして、私は姫翹桜誇^{ひめとう せう}と申します。私も皆さんと同じく1年生からの友達なんです。転入したばかりで不安ですが、分か

らない事があれば何でも言ってみて下さいね。それでは、以後お見知りおきを神谷さん」

「これはご丁寧にも。こちらこそ、これから何かとご迷惑をお掛けするかと思います、よろしく願いします姫麴さん」

そして最後の姫麴さんの自己紹介が終わり、どうしようかと思っ
ていると……………

「ちょおおおっと待ったああああ！！！！！」

「ッ！？今度は何！？」

大きな声がしたと思うと、僕の後ろに少し大柄で短い茶髪を逆立てた男子生徒が立っていた。

「おいおい、まさかお前らだけ転入生君と仲良くなろうって魂胆じ

やないだろうな。転入生はみんなの物だろ!？」

いや、あの……………誰のものでもないんですが……………

「いえ、決してそう言うわけでは……………」

「そうよ、ただ私の友達を紹介してただけよ」

「そう言う勲^{くみさ}こそ、魂胆があつたんじゃないだろうな？」

「な、何を言っているんだい優斗君……………僕は別にそんなつもりは……………」

明らかに動揺している。

どうやら魂胆があつたのは向こうのようだ。

「えええい!! だったらさっさと自己紹介するぜ!! 俺の名は近藤^{こんどう}」

勲^{いさむ}だ。これからよろしくな転入生^{てんにせい}!!」

そう言いながら肩をバシバシと叩く近藤。

何だか新撰組みみたいな名前だけど……………全く関係ないな。

と言うか、熱血系の人だな絶対に……………

「よ、よろしく……………それと、僕^{ぼく}のことは“光司”で構^{かま}わないよ。美華^{みか}さんも下の名前で呼^よんでるし」

「分^わかった。だったら光司^{みつし}って呼^よばせてもらうよ。と言うか、2人はいっ^いつからそんな関係^{かんけい}に？」

「何^{なん}iiiiiiii!! そうだったのか!？」

真顔^{まけん}で言う神迫^{かみせま}に対し、本気^{まじめ}で反応^{はんぷく}する近藤。

そして、美華^{みか}さん以外の女子^{こし}は少し顔^{かお}が赤^{あか}い。

無論^{もちろん}僕^{ぼく}もだ。

「あ、いや／＼、そう言うわけじゃなくて／＼……………」

「ああ、悪いな光司。こいつこれでも冗談を言ったんだ。あんまり真面目に言うもんだから、慣れてないと分からないんだ」

「そんなに冗談に聞こえないのかな？」

確かに、けっこう真顔で言ってたね……………」

「だったら、あたしの事も下の名前で呼んでいいよ。美華にもそうしてもらってるし」

「俺もそう呼んでくれてかまわない」

「同じく」

「私がかまいませんよ」

「分かった、圭さん、響、優斗、桜誇さん、改めてこれからよろしく……………」

「『『こっち（こちら）こそ、よろしく（お願いします）光司^{さん}！』』』」

こうして、僕の高校生活は新しい仲間と共にスタートしたのだった。

「俺は？ ねえ俺は！？ ほったらかしかよおおおおお！！！」

完全に忘れてた……………

光司 side out

三人称 s i d e

※ここから少し出てくるキャラが多いのでセリフを分かりやすくするために名前を入れておきます。

時間はたってお昼ごろ。

今日は始業式のため授業は午前中まで。

光司達は早めに昼食を済ませ、学校内を歩いていた。
転入したての光司に学校を案内するためである。

メンバーは光司、美華、圭、優斗、響、桜誇、勲である。

5階

光「この学校って、意外に広いんだね」

響「確かにここはけっこう広い事でも有名だからね」

優「けどそれ以前に、校長があんなだからな……………」

青春高校学校長・金田豪三郎^{かねだこうざぶろう}。

学校の創設者・金田駿一郎^{しゅんいちろう}の孫にして金田株式会社の会長。

自他共に認める大金持ちで、今まで人生をノリだけで生きてきた。

曰く、“人生は楽しんでこそ人生じゃ”らしい……………

そして、校長の突然の思い付きにより増改築を繰り返したためかなり大きくなってしまったのだ。

圭「あの校長、何考えてるのかさっぱり分かんないよ」

光「そ、そうなんだ……………」

そうして歩いてるうちに、彼らに男女2人の生徒が声をかける。

1人は茶髪のショートヘアーで知的な瞳が印象的な男子生徒。
所謂イケメンの部類に入るタイプだ。

そしてもう1人は若干幼げな顔の黒髪のショートヘアーの女子生徒。
そっち方面の男子にはかなり人気のありそうな顔だ。

? 「よう、元気かお前ら？」

? 「新しいクラスにはもう慣れたかな？」

「『『『蓮先輩、ぼたん先輩!!』『』『』』」

光「先輩？」

美「そっか、光司君は知らないんだよね」

桜「1年の時にお世話になった先輩方なんです」

光「そうだったんですか。初めまして、本日より2年に転入してきました神谷光司と言います。よろしく御お願いします!! 蓮先輩、ぼたん先輩」

蓮「おう、よろしく!! 俺の名は獅子堂蓮。困った事があったらなんでも言ってくれ。で、ついでに紹介すると、こっちの若干口り顔の御媛ぼたん。こいつはこう見えても3年生なんだ」

ば「蓮君ひっどーい！！ボクは自分で自己紹介したかったのに！
！それに、こう見えてもは余計だよ！！」

蓮「悪い、悪い。それと、元気そうだな圭。留年したと聞いたとき
は驚いたぜ」

勲「え！？マジか“髪の毛”！！！」

圭「髪の毛言うな！！」

勲の言い分に腹が立った圭は勲の頭目掛けて強烈なチョップをお見
舞いしてやった。

そして痛がる勲を他所に一同は驚きの声を上げる。

光「本当なんですか？」

ぼ「うん。圭ちゃんは英語と理科が壊滅的だね……………それで
単位落としちゃったんだよね」

圭「そ、そうよ……………」

いつも明るい彼女だが、この時ばかりは少し落ち込んで見えた。

光「だとしても、圭さんが僕らの友達と言う事に何の変わりもありません」

美「そうね、その通りだわ」

響「光司いいこと言うね」

優「確かにそうだな。それがどうしたって感じだ」

桜「はい。圭さんはもう私たちのお友達です」

圭「みんな……………」

それぞれの励ましの言葉に明るい表情が戻った圭。
そして、同時に彼女の中の何かが吹っ切れたようだった。

蓮「へえ、いいヤツが転入してきたな。お前気に入ってたぜ」

ぼ「ボクもだよ。そうだ!! それで……………光ちゃんは今日からボクの嫁ね♪」

光「ああ……………嫁なんですネ……………婿じゃなくて……………」

（（（突っ込むところそこ！！？）））

ほぼ全員の心が1つになった瞬間であった。

2階

ここでこの学校の施設について説明すると、1階と2階は1年生、3階と4階が2年生、そして5階と6階が3年生という感じで書く階毎に学年別に教室がある。

ただし、移動教室等があるため、1階から6階まで把握する必要があるわけだ。

ちなみに校長室は地下1階。

この学校を隅々まで知っているのは校長くらいである。

光「けど、ホント広いね」

優「ああ、俺達でもまだ全ての教室は言った事が無いからな」

勲「つーか……………なんでお前らだけケロッとしていられるんだよ!!」

光司、優斗以外は少し疲れの色が見え始めていた。

6階から教室を案内して行って、今は2階。
相当な距離を歩いた事になる。

そして、普段はエレベーターで移動しているためこんなに動く事も無い。

すると、前方に人を発見。

響「ねえ、あれって……………」

優「ああ……………なぎ薙だよな。ここに入ったのか」

響と優斗は前方に見える生徒に見覚えがあるようだ。

その後姿は艶のある長い黒髪を腰の辺りまで伸ばしている。
しかし、語弊が無いように言っておくがその生徒は女子生徒ではない。

そう、男子生徒なのだ。

優「よっ、薙。ここに入ったんだな」

薙「あ、先輩方………どうも」

薙と呼ばれた男子生徒は優斗に呼び止められ、言葉少なく返事する。
その顔は高校生と言うには少し幼い顔だった。

響「紹介するよ。俺と優斗の後輩の師鳳^{しほうかん}神薙。少し無口だけどいいヤツだよ」

そう響に紹介され、薙は無言で会釈をした。

光「よろしく。僕は今日転入してきた神谷光司」

美「藍野美香よ」

圭「上野圭よ」

桜「姫翹桜誇と申します」

勲「近藤勲だ、よろしくな」

一同がそれぞれに自己紹介すると、それにあわせて薙は一礼をする。

圭「それにしても、あんたも光司と同じ部類の人間ね」

光・薙「??????」

圭の言葉に？マークが浮かび上がる光司と薙であったが、その他のメンバーは納得しているようだった。

光「いったいどういう意味なんだろう……………」

薙「……………さあ？」

いつまでも分からない二人だった……………

というか、光司はいい加減に気付かないものだろうか……………

三人称 side out

響 side

光司達との学校めぐりが終わりそろそろ俺達はそろそろ帰ることになった。

で、今は桜と圭と勲の4人で待っているところだ。

理由として職員質にいった光司と美華を待っている。

ちなみに優斗は近く行われるサッカー部の大会の助っ人のため部活に出ている。

「それにしても、遅いですね」

「そうね、怒られてるのかな？」

「いや、入学早々それはないだろう……………」

「勲じゃないんだから、それはないと思うけど」

「そうそう、俺じゃないんだから……………って響！！」

「冗談」

「今のは冗談じゃないだろ！！」

ばれた。

なかなか冗談とそうでないのが難しい。

そして俺が適当に勲を相手にしていると、校門のところに人ばかりが出来ていた。

しかしただの人ばかりではないようだった。

「おい……………あれって」

「うん、鬼^{きが}餓高校の制服だね……………」

鬼餓高校。

俗に言う不良が通う高校だ。

たまにうちの高校に来てはちよっかいを出してくる。
まったく持っていない迷惑だ。

どうやら、ここの生徒が絡まれたようだった。

「先生に知らせたほうがいいでしょうか……………」

「そうだな……………それじゃあ俺達が時間を稼ぐから2人は先生を呼んできて」

「『分かった（りました）！！』」

そういつて圭と桜は職員室へ急いだ。

そしてなぜか勲もそろりそろりとどこかへ行こうとしたので……………

……………

「お前は俺と行くんだよ！！」

「おいっマジかよ！！ちよっ、放せって！！！！」

俺は嫌がる勲を引きずりながら校門へとむかった。

まあ、疲れると思うけど………いっちょやろうかな。

響 side out

三人称 side

場所は変わって、青春高校校門。

ここに、鬼餓高校の生徒5、6名が青春高校の1人の女子生徒を囲んでいた。

「だから、俺達はあいつに用があるんだって」

「おとなしく教えてくれよ。教えてくれたら何にもしないからよお」

「いえ………その、私には………」

「ああ？何言ってるのか聞こえねえんだけど？」

「て言うかさ、こいつ使って呼び出したほうが早くねえか？」

「確かに。そう言うわけだから、ちょっと付き合ってもらうぜ」

そう言うのと、いきなり彼女の手を掴み校内へと無理やり連れて行くとする。

当然彼女は嫌がり抵抗する。

「嫌………は、放して下さい……！」

「うるせえな、黙ってくりゃいんだよ……！」

彼女の言葉を見無視し、無理にでも連れて行くこうとする不良たち。

すると……へ

「ちよおおおおと待ったあああ……！」

「『『ツ!?!?』』」

「それぐらいにしとかなないと痛い目見ることになるぜ!?!」

不良達の前に颯爽と現れたのは、響と勲だった。
しかし……………

「勲、そんなセリフいつでも人の後ろに隠れてちゃ意味ないだろ……
……………」

「う、うるさい!!これで俺は精一杯だ!!」

勲は響の後ろに隠れながらさっきのセリフを言い放ったのだった。

かつこいいセリフが台無しである。

「正義のヒーロー気取りかよ」

「生憎と俺達忙しいんだよ。さっさとどけ」

不良達が2、3人前に出て指を鳴らしたり睨み付けている。

だが、それに構うことなく響は喋った。

「正義のヒーロー？………そんなのじゃない。ただ、ちよつとの間遊んでやろうと思ってな」

「なめやがって………痛い目見るのはどっちの方が教えてやるぜ！……！」

と、この言葉に業を煮やした1人が響目掛けて拳を放った。

パシッ

乾いた音が響いた。

しかし、それは拳が当たった音ではなく、全く別の音だった。

「ッ!?!?こ、光司……………いつの間に?」

「圭さんと桜誇さんが職員室に知らせに来てくれた時に聞いてね。どうやら、二人とも怪我はしてないようだね」

光司が一瞬で2人の間に入り拳を止めたのだった。

「ああ、今度は誰だ?」

「名乗るほどの者ではありませんよ。特に、あなた方のような外道にはね」

「こいつもなめやがって!!!!」

不良は止められた腕とは反対の腕でもう一発殴ろうと拳を前に出すが、それよりもはやく光司は動いていた。

「遅い攻撃ですね……………」

光司は拳を前に出すより先に止めていた方の拳を掴みながら足払いをして見事に不良1人を地面に倒した。

「ふう……………2人はあの女子生徒をお願い。こっちは僕が押さえる」

「『分かった!!』」

そして2人は女子生徒の方へ駆け出した。

そのタイミングで女子生徒の方も不良の手から離れる事ができた。

すると、不良達は光司を囲んだ。

「まったく、アイツを相手にする前に面倒なことになったな」

「だが、この数ならすぐ終わるだろ。アイツを殺るのはこいつの後だ!!」

「まったく、今度は大勢で1人の相手か……どこまで外道なんだか」

「うるせえ!! 無駄口叩けるのも今のうちだ!!」

そして一斉に不良達が光司に向かっていこうとしたその時……
……

「よお、お前ら……今日は俺に用じゃないのか……
……?」

「『『『ツ!?』』』」

その声に反応するように、声のするほうに顔を向ける。

そこには青春高校の制服を着崩した1人の少年が立っていた。

その風貌はまさに不良と言った感じだった。

「テメエ……………殲葬^{せんそう}、探したぜ!! 何時ぞやの借り、きつちり返させてもらいに來たぜ!!」

「ほう……………また喧嘩を売ってくるか……………だったら買ってやる!!」そして、必ず勝利する、それが俺だ!!」

そして殲葬は不良たちの方へと一直線へと向かっていく。

と同時に、光司はあることを思う。

(この場合……………僕はどうすればいいんだろう……………?)

任せろと言ったものの、どうしていいか分からなくなってきた光司であった。

三人称 side out

美華 side

私が桜ちゃんと圭ちゃんから話を聞きくと、光司君は一目散に職員室を離れていった。

そして私たちが、先生達を連れて校門の近くへ行ってみると………

「何これ………?」

私たちの前に広がってきたのは、ボロボロになって倒れている鬼餓高校の生徒達とその場に佇む2人の生徒と、それをみて呆気に取られている響君と勲君、それに絡まれたであろう女子生徒だった。

そして佇んでいる生徒の1人は、紛れもなく光司君だった。

「あ、皆さんに先生方。のしちやいましたけど……………一応
気絶してるだけなんで……………」

「気絶って……………光司君大丈夫なの!？」

「怪我はありませんか!？」

「ええ……………これぐらいだったら、全然大丈夫ですよ」

そういつて光司君は笑顔で答える。

これぐらいいつて……………

「それより、助かりました。あなたのお陰で早く終わりました」

「いや……………もともと俺に売られた喧嘩だ、巻き込んで
すまない。俺は3年の殲葬殺屠^{せんどうあやと}」

「初めまして、神谷光司です」

「そうか、じゃあな神谷。頑張れよ」

そういつて殲葬先輩は行ってしまった。
あの人をあんな間近でみたのは初めてかも……………

あ、そうだ女の子!!

私は達は急いで女の子の方に駆け寄った。

どうやら怪我もしていないようだったので安心した。

「あなた大丈夫？」

「あ、はい……………この人たちが助けてくれたので大丈夫でした」

そう言っていると、堂々と胸を張る勲君。

多分何もしてないわね。

「何か今失礼なこと言われた気が!!」

「でも、どうせアンタ何もしてないんでしょ？」

「失敬な!! 俺はちゃんとあいづらにガツンと言ってやったぞ!!」

「俺の後ろから”ね」

「うっ……………」

その様子からすると、本当みたいね……………

まさに名前負けだわ。

「申し遅れました。私1年の玖月碧くつきみどりと言います。あの……………助け
ていただいて本当にありがとうございました」

「いやあ、大したことはしてないさ」

「あんた（お前）はね（な）！！！」

圭ちゃんと響君に怒られる勲君。

まあ、確かに頑張ったのは響君と光司君かな。

「いや、勲も頑張ったよ。本当に何も出来ない人なら、あんな事言
うなんて出来ないと思うからね」

「さすが光司！！分かってるじゃねえか！！！」

「でも、1番はやっぱり光司さんですね。あの数を相手をものとも
しないなんて」

「いや、それよりもすごいのは、響だよ」

「お、俺？」

「そ。誰よりも先に玖月さんを助けに行った。これって、本当にすごい事だよ」

「そ、そっか……………ありがとう」

「うん。どういたしまして」

「あの……………」

私たちが話していると、申し訳なさそうに玖月さんは声を上げた。

「先輩方のお名前を伺っても宜しいでしょうか？」

「ああ、ごめんね。まだ名乗っていなかったかな。僕は神谷光司」

「藍野美華よ」

「上野圭だよ」

「姫翹桜誇と申します」

「神迫響」

「俺は近藤勲だ」

「あの、改めてありがとうございます！！神迫先輩、近藤先輩、

神谷先輩!!」

「『『どういたしまして』』」

「それでは、お先に失礼します」

そういつて玖月さんは足早に帰っていった。
きっと親が心配してると思ったのかな。

「さて、私たちもそろそろ帰りましょうか？」

「さんせー!! 俺疲れちゃったよ」

「だから、アンタは何もしてないでしょ!!」

「いでッ!!」

こうして、色々あった一日もようやく終わりを迎えたのでした。

美華 side out

◇第3話「いよいよ始まる新しい生活………なんだけど、こんな日常あり

ここから波乱の学園生活がスタートします……!!

と言いたいところですが、次回は藍野家の様子をお送りいたします。

それでは、次回もお楽しみに……!!

◇第4話「どうしても僕はこうなってしまっただろう……」

タイトル通りです!!!

光司がいつにも増して大変な事に………

それではどうぞ!!

◇第4話「どうしても僕はこうなってしまうんだろう……」

光司 side

みんなで帰っている途中、僕と美華さんは一緒の方向だからと言ってみんなと別れた。

さすがに“一緒の家に住んです”とは、口が裂けても言えない。

誤解どころか、あらぬ方向へと話が飛びそうだからである。

そんなこんなで僕らは家にたどり着いた。

ちなみに言うと、今日は金曜日らしく明日と明後日は学校は休みらしい。

なので日曜日に美華さんと一緒に桜誇さんの家に行くことになった。

「『ただいま（帰りました）』」

「あら二人とも、今日は始業式だって言うのに随分と遅かったわね？」

「ちょっと色々あってね。ね、光司君」

「ええ、色々と」

「??????」

頭上に？マークが浮かんでいそうな麗華さんを置き去りに、僕と美華さんは部屋のある2階へと上がった。

「それにしても、今日は疲れたわね」

「初日にしては確かに……………」

そう言いながら僕はブレザーとネクタイを脱ぎ、ハンガーに掛ける。青春高校は男子がブレザー、女子がセーラー服と、それぞれ違った型の制服だ。

「でもよかったですよ、同じクラスに美華さんがいて。それにみんなとも友達になれたし……………楽しい学校生活が始まりそう……………」

……………ですね……………」

振り返ってみると、美華さんが“なぜか”僕の使わせて貰ってる部屋で着替えようとしている。

そう、“なぜか”

大事な事なので2回言ってみました。

そして僕は、そんな美華さんに恐る恐る聞いてみる。

「あ、あの／＼／＼……………美華さん、ここで着替えるんですか／＼／＼？」

「えっ？……………あ、ああ！！そうよね、ここは今光司君が使ってるんだったわね／＼！！つい癖で／＼……………」

セーラー服のネクタイに手をかけていた美華さんは慌てて部屋を出ていった。

もしかして、言わなかったらあのまま着替えてたってこと／＼／＼／＼……？

「はぁ………まあとりあえず僕も着替えよう」

そう言いながら僕はシャツのボタンを外そうと手を伸ばした。

しかしここであることに気が付く。

着替えがない。

そう、制服を着替えた後の普段着と言うものが僕には無かった。

ここに来てからは怪我の治療などで体に包帯を巻いていることが多かったし、外にも外出しないためイージスの部隊服を羽織っていただけだった。

その部隊服も今日は洗濯されてしまったらしい。

「……………麗華さんに相談してみよう」

そして僕はボタンから手を放し1階へと降りた。

リビングに向かうと既に美華さんは普段着に着替えていた。

「あれ、光司君まだ着替えてないの？」

「いや、実はその……………」

僕は2人に事の次第を説明した。

そして、同時に新たな問題も発覚した。

「そっか、そうだね。でもどうしよう」

「そうね。家には男物の服なんて無いし……………これから買いに行くって言うっても、お店閉まってるし……………」

「あ、いえ。今日はこれで過ごすんで、別に急がなくても……………」

「そうは言ってもね……………あ、そうだ!!」

すると、美華さんが何かを思い付いたのか麗華さんに耳打ちし始めた。

別に耳打ちしなくてもいいと思うんだけど……………

「ねえ光司君、ちょっと待っててね♪」

そう言うど麗華さんは嬉しそうにどこかに消えた。

いったい何を話したんだろうか……………

「あの美華さん、いったい何を思いついたんですか？」

「それはね、見てからのお楽しみ♪」

「は、はあ……………」

ますます気になる……………

しかし、この時の僕はまだ知らなかった。

世界が違えど、所詮僕は僕なのだというのに………

どこにいてもこんな事になるのだということに………

10分後

「えっと／＼………どうしてこうなったんだろう／＼………?」

今の状況を説明すると、僕は美華さんの服を着せられている。
ちなみに服装的に言うと、レースの付いたブラウスに膝上くらいの
スカートを穿いてる。

どうしていつもいつも女性の服を着せられるのだろうか………

《それはお約束と言うものだよ、ワトソン君》↑天の声

「何だよそれ!!」

「どうしたの光司君？」

「だれに言ったの？」

「あ、いえ……………なんか言わなきゃいけないと思って……………」

「そうなの……………でも、やっぱり私の見立てに間違いはなかったわね。女物でも普通に着れるわね」

「そうよね、本当に男の子なの？」

「……………／／／／／」

最早何も言えなかった。

“ちよつとこれを着てみて”と言われたときに断ればよかった。

後悔先に立たずとはこの事なんだな、としみじみと思った。

しかし問題はこれだけでは無かった……………

「はぁ……………それじゃあ、もうそろそろ制服の方に着替え
ていいですか？」

「え？制服ならもう洗濯しちゃったんだけど……………」

「え……………えええええっ！！！！！」

どうしてこのタイミングで洗濯するんですか麗華さん！！

したがって僕は着るものが完全になくなってしまった。

そして結果的に……………

「なんか／＼……………下がスースーする／＼／」

「それは、慣れるしかないわね」

「慣れなくてもいいでしょそこは！！！」

「なんだか娘がもう1人出来たみたいだわ♪」

かくして、この格好で過ごす事になったわけだ。

そして2人は何事も無いように接しているし……………てか、麗華さん確信犯でしょ!!

「それじゃあ光司君、今日もお願いしていいかしら♪」

「……………はい……………」

そして僕は“いつもとは違う格好”で“いつも通り”料理を作り始めるのだった。

「ほんと、スースーする／／……………」

光司 side out

三人称 side

あれから時間は経過して夜の10時。

光司達は夕食を済ませ各々に時間を過ごしていた。

そしてここには光司がベッドの上に横になっている。

「やっと1日が終了か……………本当に色々あったな」

《It is so. There were really various happens (そうですね。本当に色々なことがありました)》

「うん、そうだね。……………はあ、高校生も大変だ」

と、至極当たり前のことを口にしながらベッドに顔を埋める。

しかし彼の場合、以前の大変さと似通った点もあるが……………

「そうダックス。リンカーンコアの方はどうか？」

《Please wait. Appar-
ently, your linker core is al-
most complete. (少々お待ちください.ど
うやらマスターのリンカーコアはほぼ完全な状態と言っているよう
です)》

「そう.分かった」

そう言うと光司は黙りこんでしまった。

魔法のことを通して、“彼女達”の事を思い出していたのだった。

(みんなに悪い事をしてしまったな.取り合
えず帰ったら謝らないと.)

「.ごめんね、みんな.」

そんな風に思いつめていると、部屋をノックする音がした。

その人物は、この家の人間である美華であった。

「光司君、ちょっといい？」

「ええ、どうぞ……………」

そう言うと、美華は光司の部屋へと入ってきた。

美華は既にお風呂に入っており、寝巻き姿にタオルを首にかけた格好だった。

そして美華はベットに腰掛け、ふうと一息つく。

同時に、お風呂上りのフローラルな香りが辺りに広がる。

「どう光司君、何か思い出せた？」

「いえ……………まだ、何も……………」

「そう……………でもじきに思い出すわよきっと」

「そうだといんですけどね……………」

「あ、そうだ。お風呂開いたから入っていいわよ」

「分かりました」

「あ、ごめんちょっと待って!!」

「えっ!」

そして光司がベットから起き上がり風呂場に向かおうとすると、急に美香が光司の服を掴んで呼び止めた。

しかし光司は急な事だったので驚いてしまい、起き上がろうとしたところを掴まれてしまったため体勢を崩してしまった。

そして2人がどうなかつたかというところ……

「『……………』
／／／／／
『』」

光司が美華の胸に顔を埋めるように倒れこむ形となってしまった。

傍から見ると、光司が美華を押し倒しているように見える。

しかしこれはどちらかと言うと、美香よりも光司の方が不味かった
……………

光司は極端に女性に弱い。

それこそ、思春期の中学生の様に女性に対しての免疫が無いのだ。

したがって胸に顔を埋めたりなんかすると……………

「……………／／／／／」

「こ、光司君／／……………?」

へんじがない、ただのしかばねのようだ

「って、光司君!!!! 起きてったら!!!」

光司はそのまま意識を失ったと言う……………

するところでもう1人部屋を訪ねる人物が……………今度は麗華である。

「光司君ちよつといいかし……………ら？」

その場の光景を見て麗華は言葉を失った。

それはそうだろう、今の状況は正直言ってかなり危ない……………
……………主に光司的に。

「ごめんなさい、お邪魔だったわね!!」

「ちよつ、母さん!!」

麗華は空気を読んでか読まずか、急いで部屋を出た。

当然美香はすぐに呼び止めてこうなっただいさつを説明した。

「なるほど……………光司君もまだまだ子供ね」

「母さん……………そんなこと言ってる場合じゃないと思うんだけど。早く光司君起こさないで」

「ちょっとまって美香」

光司を起こそうと、光司の肩に手をかけた美香だったが麗華に止められその手を戻した。

そして麗華は“ある物”を取り出し美香に見せた。

「まさか母さん……………これ……………」

「そ、そのまさかよ♪」

「はぁ……………ごめんね光司君……………」

その夜、眠っている光司に2人の黒い影が忍び寄ったのだった。

明日の朝

「ん……………あれ？いつの間に寝ちゃったのかな……………ん？」

光司は起きると自分の服装に目を凝らす。

見ると、昨日自分が着ていた服では無く可愛らしいパジャマ姿になっていた。

無論、女物である。

「な、どうなってるのおおお／／／／！！！！！！」

朝の藍野家に光司の叫び声が響きわたった。

三人称 side

美華 side

光司君の悲鳴が我が家に響き渡った日から1日たって、今日は日曜日。

私たちは桜ちゃんの家に行く事になっていた。

そして今は2人で桜ちゃんの家へと向かっているところ。

ちなみに言うと、一昨日の事でさすがに怒った光司君はすぐさま母さんを連れて男物の服を買いに行った。

似合ってたと思うんだけどな……………

「まったく、麗華さんには困ったもんですよ!!」

「ごめんね。家の母さんかわいい服を着せたがる性質なの……………
…本人に悪気は無いんだけど……………」

「……………分かりました。もう言いません。それより、桜誇
さんの家ってどこなんですか？」

「ん、もうすぐそこよ」

今私たちが歩いているのは桜ちゃんの家の塀の外。

もう少し歩いたら門が見えてくるはずんだけど……………あ、
見えた。

そして私たちは、桜ちゃんの家の門の前へとたどりつき、インター
ホンを押す。

するといつものメイドさんの声がして門がゆっくりと開き始める。

毎回見てるけど、やっぱりすごいわね……………

「さて、それじゃあ入りましょうか」

「はい」

そして私たちは桜ちゃんの屋敷へと足を踏み入れていった。

まずは私たちは客間に通された。

いつもながら見事な調度品の数々に、ホコリひとつ無い綺麗な部屋。既に部屋には紅茶が人数分用意されており、いい匂いのするクッキーもあった。

「すごいですね……………」

「まあ、桜ちゃんはおもてなし好きだからね」

「そ、そうなんですか……………」

「あ、お2人ともお待ちしておりました」

すると、そうこうしているうちに桜ちゃんがやってきた。

いつも思うけど、桜ちゃんの私服姿ってかわいいんだよね〜

「桜誇さん、お邪魔してます」

「いいえ。どうぞお寛ぎになってください」

「それじゃあお言葉に甘えて……………」

こうして、私たち3人はおいしい紅茶を飲みながら優雅なひと時を過ごすのでした。

美華 side out

光司 side

僕らは桜誇さん宅で優雅なひと時をすごしていた僕は、突然メイドさんに呼び出され別室へ通された。

僕はなんとなく嫌な予感がしたんだけど、その予感は現実のものとなった……………

「どうしてこんな事に／＼……………?」

「お似合いですよ光司様／＼!!」

「本当に、男性の片でいらっしゃるんですか／＼?」

なぜか僕は姫麴家のメイドさんたちに目を付けられ、この通りメイド服を着せられてしまった。

この服には何度お世話になった事だろうか……………僕は事あるごとにこの服を着ている気がする。

ちなみに、今は髪を下ろしカチューシャも付けてもらっている。そしてそのカチューシャには……………

「そして……………どうしてネコ耳／＼?」

そう、カチューシャにネコ耳が付いていたのである。これでは語尾に“ニャア”とでも付きそうである。

するとそこへ……………

「みなさん、いったいどうなされたんですか?急に光司さんを連れ

出したりして？」

「なんかメイドさんたちの目がもの凄く楽しそうだった気がするんだけど……………」

僕がなかなか帰って来ないと思って桜誇さんと美華さんが部屋にやってきた。

僕は急いで顔を隠し、その場にしゃがみこんだ。
こんな姿を2人に見られる訳には行かないからだ。

「えっと、そちらのお方はどちらなのかしら？」

「……………もしかして……………」

美華さんは昨日のこともあってか、僕ではないかと疑い始めた。

不味い……………知られないうちにこの場から立ち去った方が良
いかもしれない……………」

がしかし

「光司様、どちらへ行かれるのですか？」

「へう／＼！？」

僕はこっそりと抜け出そうとしているところをメイドさんに見つかってしまった。

なん……………だと！？

「え……………今、光司さんとおっしゃいましたか？」

「……………はあゝ、なるほどね……………光司君またやつちやつたわけか」

「ま、また！？」

どうやら今ので完全にばれてしまったようだ。

出来れば知られたくなかったんだけど……………しょうがないかな。

そして僕は2人の正面に立った。

「実は……………美華さんの言う通りなんです／＼……………」

「と、言う事は……………このメイドさんは、光司……………さん？」

「……………ご名答です／＼……………」

「なんというか……………彼（光司君）と言う人が分かってきた
気がするわ……………」

こうして、僕はいつに無く何度も服を着替えましたとき。

チャンチャン♪

って、“チャンチャン♪”じゃないよ!!!!!!

◇第4話「どうしても僕はこうなってしまうんだろう……」

次回は学校に戻り日常を書きたいと思います。

まあ、お察しの通り日常と書いて非日常なんですが………

お楽しみに………!!

◇第5話「学校生活って……こんな風なのかな？」 (前書き)

長らくお待たせしてしまいました!!

最近大学のほうでテストがありまして………そうとう遅れてしまいました!!

そして新たにオリキャラを応募していただいた、エドワード・ニユーゲートさん、珀狼さん、ムラサメさん、なっぺさん、本当にありがとうございます。

それではどうぞ!!

◇第5話「学校生活って……こんな風なのかな？」

光司が着せ替え人形となった日から一夜明け、月曜日。

今日から本格的に授業が始まる。

そして、光司の波乱の生活も本格的にスタートすることになる……
……

光司 side

今日からいよいよ授業が始まる。

僕は期待を半分、不安を半分抱えながら学校へと向かっていった。

教室に入ると、すでにほとんどの人が来ていた。

僕は美香さんと一緒に席に座りみんなと話し始めた。

そしてなぜかみんな笑いをこらえていた。

(どうしたんだろうみんな……………?)

不思議に思い辺りを見回すと……………

光「あ、あれかな……………?」

教室のドアの所を見ると、どうやらドアの所にイタズラが仕掛けられているようだった。

今回の仕掛けはドアを開くと水の入ったバケツが傾く仕組みで開いた人がずぶ濡れになる仕掛けらしい。

おそらく……………いや確実に勲の仕業だろう。
クラスみんな曰く、“いつもの事”らしい。

しかしこうしていると先生が不味いことになりそうなので

光「はあ、まったくこんな手に引っ掛かる人がいるのかな?」

とぼやきつつ仕掛けを解除しに向かうと、勲が急いで止めに来た。

勲「おいおい光司!! 何するんだよ!？」

光「何って、仕掛けを解除するんだよ」

勲「よしてくれよ! 俺これだけが楽しみで学校来てんだから」

いや、明らかにおかしいでしょ……………それだけが楽しみって……………

と、そうこうしている間に足音が聞こえてきた。
どうやら宮原先生が来たようだ。

光「とにかく、これ外さないと先生が水浸しになるでしょ」

男子「『『『『それが良いんだろ!!!!』』』』」

光「えええっ!？」

突然、クラス中の男子が一斉に言い放った。

こんなにも息がそろうものなのだろうか？

不思議だ。

男子1 「何言ってんだよ神谷!!」

男子2 「そうだぜ!! 見たくないのかよ!?!」

男子3 「お前それでも男かよ!?!」

光 「……………?」

何を言っているのか僕には分からなかった。

いったい何を見たいんだろうか。

こうなると、逆に何が見えるのか気になってきた。
そしてなぜか女子のみんなの視線が、さっきから勲達に向けられて
いる。

それはもの凄く寒い視線だった……………

とりあえずその答えはもうすぐ明らかになるだろう、そう思い僕は
席に戻った。

光「いったい何なんだ……………」

僕が難しい顔をして考えていると、美香さん達が呆れた顔をしながら言ってきた。

美香「光司君……………あんまり考えない方が良いわよ」

優「そうそう、^{アイツ}勲の頭は“アレ”でいっぱいだろうしな」

響「違うないね。そして多分だけど……………光司は見ないほうが良いかな……………」

光「??????」

僕はますます分からなくなってきた。

そして、ついに先生がドアを開けようと手をかけるのが見た。

（いったい、何が見えるって言うんだ!!）

僕は息をのんでその瞬間を待った。

そして……………

瑞「おはようござ……………きゃああ／＼！！！」

先生は見事に頭から水を被ってしまった。

もちろん、メガネはずれ落ち髪や服はビショビショになっていた。

瑞「んもお！！近藤君！！水はあれほどいけませんって言ったですよ！！！！」

勲「すみません先生」

そっけない返事をする勲……………絶対反省してないな、これ。

勲「それより先生、今日は黒ですか？」

瑞「はい／＼？」

勲のその言葉に先生を見てみると、先生の着ている服が透けて下着が見えてしまっている。

どうやら勲の言っていたのはこの事だったのだろう……………ま
ったくもって言葉が出ない

もちろんこれは呆れてしまっただけの方だ。

よく見ると、男子の視線は先生に釘付けのようだ。

優斗や響は視線を逸らしている。

うん、それが普通の反応だね。

まったく、高校生ってもっと大人なんだと思ってたんだけどな……

……………

僕はこういうのは慣れている（言いたくないけど、これよりひどい
状況に何度も陥ったことがある）ので、急いで先生の方に近づいて
タオルを取り出した。

光「先生、これを!!」

瑞「あ、ありがとう神谷君／＼……………」

とりあえず僕は先生にタオルを渡し、近くにいたクラスの女子の人
に保健室に連れて行ってもらえるように頼んだ。

こうして、しばらくの間授業は自習になった。

そして

勲「いやあ惜しかったなあ。光司が邪魔しなきゃもう少し見れたのに」

男子1「本当だよ。神谷何するんだよ」

男子2「そうだけ、何紳士ぶってるんだよ!？」

そしてなぜか、僕はクラスの男子達に問い詰められていた。

いったい僕が何をしたというんだろう、自分で言うのもなんだが当然の行動をしたまですると思う。

よし、と思い僕が弁解しようとする

女子1「あんた達!!!」

女子2「何自分達が正しくて神谷君が間違った事したみたいに言ってるのよ!？」

女子3「そうよそうよ!! 神谷君はいいことをしたわ!! 鼻の下を

伸ばしていたあんた達と違ってね!!」

クラスの女子の人が僕が弁解する前に男子達を叱り始めた。

女性は怒らせると怖いんだよね……………

女子1「だいたいね!! あんた達はいつもいつも……………」

男子「『『『……………す、すいませんでした……………
……………』』』」

そしてなぜか、ほとんど（僕と優斗と響以外）の男子はクラス中の女子からこっぴどいお叱りを受ける事になりました。

光「ねえ……………いつもこんな調子なの？」

優・響「『ほとんどな』」

僕らはただ呆然とその光景を見ているだけでした。

光司 s i d e o u t

三人称 s i d e

宮原先生が水を被り保健室に行ってからしばらくたち、ようやく教室に戻ってきた。

幸い1時限目はH Rホームルームの時間だったのでそれほど支障はなかった。

そして今日のH Rは……………

瑞「さてみんな、ちょっと遅れましたが今から委員会を決めたいと思います!!」

一同「『『『『ええええええ〜』!!!!』』』』」

そう、学校生活において決めなくてはならない委員会の取り決めだ。

そしてこの場合、大概面倒な役柄が最後まで残る事になり結局ジャンケンで決めるパターンが多い……………

女子2 「どうする、何やろうか？」

男子3 「誰かがやってくれるまで待つかな」

女子3 「でもどうせ1人1役になるんでしょう？ だったら私は早く決めよっと」

そうこうしている間に宮原先生は黒板に委員会の役と、その横に男女2人分の○が書いてある。

しかし1つだけ、クラス中がざわついた役職が……………

男子1 「がっ……………こう……………いいん……………？」

女子1「学級委員の間違いじゃないの？」

男子2「いや、学級委員はちゃんとある……………いったい何なんだ？」

クラス中がざわつくのも無理はない。

何せこの委員会は2年生だけにあるので、1年生の時には知らなかったのだった。

瑞「えっと、みんなは初めてだと思うけど2年生には学校委員会と言う委員会があるの。簡単に言うと、学校の事なら何でもする委員会ね」

なんと理不尽な委員会であろうか。
こんな委員会があるのは青春高校だけであろう。

そして生徒の方も、こんな役に入ることなくジャンケンで決めるパターンかと思われたが……………

勲「先生!!」

瑞「はい、近藤君」

勲「僕は、学校委員会に神谷君を推薦します!!」

光「ええっ!? ちょっと勲!!」

突然勲が挙手をして立ち上がったかと思うと、学校委員会に光司を推薦した。

これにはクラス中が多いに喜んだが、同時に“転入してきたばかりの光司に出来るのだろうか”と言うと不安もあった。

優「勲、それはいいかもしれないが光司はまだ学校に慣れてないぞ。それでどうして光司を推薦するんだ?」

圭「確かに……去年友達がやってるの見てたけど、あれは大変よ」

不審に思った優斗と圭が勲を問い詰め、他の人も勲の方を向いてその返答を待っている。

そして、待っていましたとばかりに勲は答え始めた。

勲「ごほん!! 確かに、光司は転入してきたばかりで右も左も分からないかもしれない。だが、だからこそ早く学校に慣れてもらうために学校のことがよく分かるこの学校委員会に推薦したのだ!!!」

「！」

これにはクラス中は納得をせざるを得なかった。

普段何も考え無しに行動する勲がこんな考えを持っていたとは……
……まさに驚きである。

勲「まあ無論、光司が承諾するならの話しだけだな」

その途端、今度は光司にクラスの視線が集まる。

これで光司に決まれば面倒な学校委員会にならなくて済む……..
……そんな思いを抱きながら、光司に視線を送った。

光「うーん……..
……推薦されちゃったら仕方がないかな、それに
学校の事も色々知りたいし」

瑞「それじゃあ、神谷君……..
……引き受けてくれる？」

光「はい、分かりました。学校委員会、やらせていただきます」

その瞬間、クラス中に喜びの声が響き渡った。

しかし光司は知らなかった。

これが波乱の高校生活への幕開けだと言う事に……………

三人称 side out

優斗 side

1時限目からだいぶ時間はたって今は昼。

俺達はいつもの通りみんなが集まって弁当を食べる事にした。

俺達は1年の頃から昼は屋上で取るようにしている。

そして昨日紹介できなかった他のクラスの仲間も、今日光司に紹介するつもりだ。

勲「いやあゝ、やっと授業が終わったぜ」

圭「あんたほとんど寝てたでしょ」

響「そうそう、何度先生に起こされた事だろうね」

勲「う、うるさい!!寝る子は育つんだよ!!」

と、まあこんな具合に俺達は屋上で他のクラスのメンバーを待っているところだ。

前の授業が伸びてでもいるのかな？

桜「それにしても、光司さんすごかったですね!!」

美華「ええ、あれは驚きだったわ!」

光「いえ……………そんな……………」

そう、授業を受けていて分かった事が1つ。

それは、光司は相当頭がいいことだ。

授業中聞かれた質問には全体的確に答え、先生が嫌味に出した問題でも簡単に答えたのだ。

光司が言うには“予習してたところがたまたま当たっただけだよ”らしい……………にわかには信じがたいが、そう言うことにしておこう。

光「それにしても、少し遅いね。これから来る人たち」

響「そうだね……………もう授業は終わってるはずんだけど……………」

と、俺達がぼやき始めていたら……………

？「悪い、遅くなった!!」

ドアの開く音と同時に、数人の男女がぞろぞろとやってきた。
まったく、このまま来ないかと思ったぜ。

？「ごめんごめん!! 先生の授業がなかなか終わらなくて」

？「ほんと、学生の貴重な昼食の時間を取らないで欲しいわ」

？「同感だ」

そしてようやくいつもの昼メンバーが揃い、ようやく昼食を取り始めた。

優斗 side out

三人称 side

いつものメンバーが揃い、楽しい昼食が始まった。

青春高校では食堂もあるがほとんどが弁当持参で来る生徒がほとんどだったため、昼食の時間は学生達にとって楽しみの時間の一つだった。

？「そう言えば、見ない顔だな？」

優「そうか、まだ紹介してなかったな。金曜日に転入してきたんだ」

光「初めまして、神谷光司って言います」

？「そうだったのか。俺は立華^{たちばな} 美樹^{よしぎ}、美しい樹と書いてよしきだ。間違ってもミキちゃんとか言うなよ。悲しくなるからな……………

……」

そういつて自己紹介しながら悲しんでいるがたいのいい男が彼だ。身長も高いので一見するとがっちりしたタイプだと思われがちだが、その心は至極弱い。

クラスではムードメーカー的存在ではあるが、その見た目とは裏腹な幼稚的な行動のため好かれてもいるが嫌われてもいる。

所謂、“友人にしたい人ランキング1位、且つ恋人にしたくないランキング1位”な男。

美樹「なんか、今もの凄く失礼な説明されなかったか？」

気のせいです♪

美樹「そうか、気のせいかな」

光「誰と、話してるの………?」

?「まあこいつはほつといて良いよ。ボクはジャンゴ、ジャンゴ・イリオス。ギリシャ人の血も入ってるから、日本人っぽくないんだけどね。それじゃよろしく」

そう話すのは、クリーム色の髪になぜか首に深紅のマフラーを身に付け真紅と黒のブレスレットを腕につけているのが特徴の少年。

ほぼ全ての部活から勧誘をされているが本人は全て断っている。ちなみにこれは彼が運動音痴なのではなく、その逆で本人は否定しているがかなりの体力があるためである。

こういう人ほど運動部に入りたがらないのだろうか。

？「そうそう、美樹はたまに訳の分からないことするからあんまり気にしない方が良いわよ。自己紹介するわね、私の名前はエール、エール・ソニアス。よろしくね」

次に自己紹介したのは茶髪の長髪で後ろでポニーテールにしている活発なタイプの少女。

サバサバした態度と運動神経のよさで男子にも女子にも人気がある。だが彼女には本命が……………

そして彼女には誰にもいえない秘密があるよう？

？「次は俺だな。俺はロンメル・ヴェストール。確か、ぼたんや神薙とはもうあったんだよな？俺はそいつらとは幼馴染なんだ。ちなみに言うと、俺もジャンゴみたいにスイスの血が入ってるんだ。それじゃ、これからよろしくな」

その次は青い髪の長髪を後ろで束ねているこの少年。本人は髪を切

ろうとしたらしいが、ぼたんの強い要望で切らなかったらしい。
どちらかと言うとイケメンなタイプで狙っている女子も多いとか……

ちなみにアイスには目が無く、それを邪魔するものは何物でも容赦しない。

？「最後は私か。私は上泉^{かみいずみ}滯^お。剣道部の副部長をやっている、よかったら1度見に来てくれ。これからよろしく頼む」

最後に自己紹介したのは、綺麗な黒髪を腰の辺りまで伸ばした少女。十中八九美人に分類される美貌の持ち主で、真面目でしっかりした性格。

そして彼女には1人兄がいて、のんびりやな兄をしかる事もしばしばある。

唯一の欠点は、教え方がほぼ擬音なこと。

光「僕のことばは光司って呼んでくるとありがたいかな。それじゃあ、みんなよろしく!!!」

「『『『『『よろしく(な)、光司!』『』『』『』」

こうして一通り自己紹介を終え、一同は昼食を取り始めた。

勲「そう言えば、光司は料理が得意だって言ってたがその弁当も前が作ったのか？」

ふと食事の最中勲がこんなことを言い出した。

光司は何の躊躇もなく“うん”と答える。それが引き金になることなど思いもよらずに……………

勲「やっぱりそうか。だったら少し味見させてもらうぜっ！！」

そして、勲を皮切りに次々と箸達が光司の弁当箱目掛けて飛び交った。

光司は呆気にとられていたため、弁当箱の中身はほとんど無くなってしまった。

光「ああ……………中学以来だな。この光景……………」

光司のお弁当の評判は中学生からで、よく友達におかずを取られていたのだ。

彼の人のよさもあってか、隣のクラスからも貰いに来るほどの人気だった。そしてそのたびに光司のお弁当は減っていったと言う……

.....

ジャ「本当にこれ光司が作ったの!？」

美樹「最早弁当のクオリティーを超えてるぜ.....」

ロン「確かにな.....これ店でもだせるんじゃないか.....?」

エ「いつか教えて欲しいわね.....これ」

滯「うゝん、人は見かけ通りな時もあるのだな.....」

勲「まさに出来る嫁ってところだな」

響・優・桜「『嫁は違うんじゃない(んです)か?』」

光「あれ.....?話が違う方向に.....」

お昼には、色々なトークが飛び交うものである。

ピーーーなことやあんな事やあこんな事も出てしまうものである。

ぼ「そうそう、光司くんはボクの嫁だからね!!これぐらい当然だよ!.....ムシヤムシヤ.....」

蓮「まったく、どこへ行ってたんだよたん.....ムシヤムシヤ.....」

？「あんまりちよっかい出さない方が良いと思うんだけど……………」
……ムシャムシャ……………」

そしていつの間にか、他のメンバーも集まってきた……………」

光「先輩方いつの間に!？」

圭「なんかさっきからいたわよ」

美華「そうね、光司君のお弁当もちゃっかり貰ってたわよ」

そう言われ、光司がふと自分の弁当を見るともう弁当の中身は無かった。

漣「兄さん、ここにいたんですか!？ずいぶん探したんですから!」

？「あ、ああ……………ごめん……………」

そう言って漣はその男に弁当を渡す。黒髪を後ろでまとめているところから漣の兄のようだ。

漣「光司、紹介しておこう。私の兄だ」

？「蓮とぼたんから話は聞いてるよ。俺は上泉剣斗^{かみいずみけんとう}。剣道部の部長をやらせてもらってる。まあ、よろしく頼むよ」

光「こちらこそ、よろしくお願いします」

お互いに自己紹介が終わると、再び弁当を食べ始める一同。
すると……………校内放送が。

放「2年A組、神谷光司君……………至急職員室まで来てください」

光「ん？何だろう、職員室なんて」

優「とにかく、行ったほうがいいんじゃないか？」

勲「そうそう、弁当は俺達に任せていつて来い」

光「いまいち納得しないけど……………行って来ます」

そう言うのと、光司は不安なまま職員室に向かっていった。

そして、光司の弁当は綺麗さっぱり無くなっていたと言う……………
……………

場所は変わって職員室。

光司が到着すると、先生達が神妙な顔で悩んでいた。

先「おう、すまないな神谷呼び出してしまつて」

光「いえ……………それよりも、何かあつたんですか？」

先「ああ……………実はな……………」

先生の話によると、この時期になると近くの他の高校から不良が集まり青春こせいにちよっかいを出しに来ると言う。

それを何とか穏便に済ませるのも立派な学校委員会の仕事らしい。確かに何でも屋である、学校委員会。実はこの委員会、毎年クラスの中で最強の位置にいる者になる委員らしく去年は殲葬せんそう殺屠あやとなどが勤めた。

先「何でも転入したその日に、殲葬せんそうからお墨付きを貰つたそうじゃないか。期待してるぞ」

光「ああ……………頑張れってそう言うことだったのか……………そう言うことなのかな？」

疑問に思いつつも、最早選択肢の無い光司は不良達を出迎えに行くしかないのだった。

そして、校門の辺りに辿り着いたのだが……………

光「ちょっと……………思っていたより多いかな……………?」

目の前には先日何倍かと言うくらいかの不良の大群。
いったい青春こころに何があるのだというのだろうか……………と言うくらい集まっている。

おまけにその1人1人の視線が恐ろしく怖い。勲いさな辺りなら間違いく一目散に逃げ出すだろう。

だが光司はその人数に1人で立ち向かわなければならなかった。

まず光司は冷静に不良達に近づいた。

光「あの、青春うちに何か御用ですか?」

不1「お前、青春こころの生徒だな」

光「え、ええ……………そうですけど?」

不2「まさか女が出てくるとは思わなかったな。男の制服着てるのは……………まあいい。こいつでいいんじゃないか?」

不3「そうだな」

(また勘違いされてる……………そしてやな予感もするんだけど……………)

光司は心の中でそう思いながら不良達の話に耳を傾けていた。

不1 「それじゃあ、俺達と一緒に来てもらうぜ」

不2 「おと叫ぶなよ。抵抗しないなら、悪いようにはしないからよ」

そういうながら不良達は光司を取り囲んだ。どうやら不良達は最初から青春こころの生徒を誘拐する事が目的だったようだ。

（まさか、高校にもなって誘拐に会うなんてね……………さ
てどうしてやろうか）

光司は内心怒り（女と間違えられた事に気がつかないから）を感じながら、この不良達をどう料理しようかと考えを巡らせていた。

その時

不4 「おいなんだよお前!？」

？ 「俺を知らないとはな……………あ、そっか転校したからこの町のやつらは知らないのか」

不5 「何グダグダ言ってやがる!？とつとと失せやがれ!!」

突然校門に現れたのは、肩に掛かるほどのピンク色の長髪で眉間にしわを寄せている女顔の生徒。

一応言っておくと、彼はれっきとした男だ。彼は本来なら光司と一緒に転入してくるはずだったのだが、もろもろの事情で遅れてしまったためたった今学校に到着したのだった。

？「まったく、不良ってヤツはどこも同じなんだな……………お前らの方こそ、その子を放してさっさそ失せろ」

腕を鳴らしながら気迫で不良達につめよる男子生徒。それにつられ不良の何人かも後退りを始める。
だが、不良達も負けてはいられないと思い戦闘の準備をする。

不4「おいお前、誰だか知らないがこっちには人質が『誰が……………人質なんですか……………？』お、お前……………いつの間に……………」

いつの間にか光司は囲まれた状態から抜け出していた。そしてもう1つ……………凄まじい殺気を放っていた。

光・？「『覚悟は出来てんだろうな（いるんでしょうね……………）！！』」

不良達「『『『ひいひい！！！！』』』」

そして、不良達はこっ酷くやられてしまいました。

そしてそれ以来“青春の女顔には手を出すな”という噂が流れたらしい……………

三人称 side out

光司 side

校門にいた不良達を何とかした後、僕はもう1人いた事に気がついた。

ピンクの肩くらいの髪の人だったので一瞬女子生徒かと思ったけど、すぐに男だと気がついた。

傍から見ると僕もこんな感じに見えるのかな、となんとなく納得してみた。

光「どうも助かりました」

？「いや、まさか男が人質にされてるなんて思わなかったからな。しかもけっこう強くてこっちも助かった。そうだ、自己紹介が遅れたな。俺は凛香・フェイネス、母が日本国籍を持った日系ドイツ人だが一応日本人だ」

光「こちらこそ、初めまして神谷光司です」

凜「よろしくな光司。しかし……………お互いに苦勞する顔に生まれたようだな」

光「まったく」

こうして、僕と凜香は同じ女顔ということで意気投合したのだった。

そして、凜香と分かれた後僕は職員室に戻り先生方にことの次第を説明した。

先生方いわく“さすが殲葬^{せんそう}のお墨付きを貰っただけのことはあるな！！”と関心されてしまった。

そして丁度よくチャイムが鳴り僕は教室へ向かった。

午後の授業は英語と国語だった。

そしてなぜか授業が……………授業がまともじゃなかったわけではないんだけど……………先生の話題だけで授業が終わるって……………どうなんだろう？

※これは実際に私が高校で体験した話です。

とまあこんな感じで授業は全て終わったんだけど、帰る前に先生に呼び止められて……………

光「はあゝ、まさかこんなに大変だったとはね……………」

僕は今教室に残ってプリントの整理をしている。初めの時期は色々提出するプリントが多いため先生達も忙しいらしい。なので僕が手伝わされているというわけだ。

こんな事を手伝わせていいのだろうか……？

光「……………よし、これで終わった。さて、帰ろうかな」

窓を見ると夕焼けが差し込んでとても綺麗で、外ではサッカー部や野球部の掛け声が世話もなく飛び交っていた。

光「……………そう言えば、こんな光景初めてみたな……………」

僕は中学から管理局に入っていたためこんなに遅くなることなど無かった。それに管理局に入ってから忙しかったため、こんなに落ち着いて景色を見ることは無かった。

そして僕は時間を忘れて景色に見入ってしまった。

？「ちょっとあなた、いつまで残ってるの！？」

光「は、はいっ！！」

突然の声に振り向くと、教室の扉のところで1人の生徒が立っていた。赤い髪を腰の辺りまで伸ばしたロングヘアーにキリッとしていた鋭い眼差しで、かわいいというよりは美人という言葉が似合う感じの女子生徒だった。

そして僕は驚いたのもあるがこういった強気の女性は苦手なので思わず立ち上がってしまった。

？「ちょっとどうして立つのよ？」

光「あ、いえ……………なんとなく……………すみません」

？「そう、だったら早く帰りなさい。もうすぐ下校時刻よ」

光「そうでしたか。それでは……………ッ!？」

そこまで言いかけて、僕は窓のほうに目を向けた。するとボールがこっちに向かって飛んできたのが目に入った。僕は咄嗟にしゃがもうとすると、予想だにしない事が起きた。

？「あ、危ない!!」

扉のところにいた女子生徒にもボールが見えたのか、僕の方に駆け寄ってきた。

これは不味い予感が……………

パリイン

ガラスの割れる音と共に破片が教室に散らばり、静けさが支配する。そして僕の目の前は真っ暗になった。

言っておくけど意識はある。本当に真っ暗になった……………

いや正確に言うところ……その少女が僕に覆いかぶさるようになってしまっている。

？「あなた大丈夫！？怪我は無い！？」

光「怪我は無いですけど……／＼／＼退いてもらえると助かります／＼／＼」

？「ッ／＼！！キヤアアアア／＼！！！」

光「ゴフッ！！」

僕はその少女にアップパーを喰らい、少女は顔を赤らめて急いで教室から走っていった。

光「学校生活って……こんな風なのかな？」

教室に1人残った僕はそう呟いてみた。

光 side out

◇第5話「学校生活って……こんな風なのかな？」 (後書き)

この小説では、あの人物にこんな事をして欲しい、こんなネタはどうか、等を随時募集中です。

感想や、メッセ等でお気軽にどうぞ!!

それでは次回もお楽しみに!

◇第6話「学校荒し事件!!・前編」(前書き)

このタイトルでお分かりになる方もいるのではないのでしょうか？

先に言っておきますと、作者にトリックなどの知識を思いつくことは多分無理ですのでご了承ください。

そして読者の皆様も謎解きに参加する、などと言うのはこの駄作者には到底出来ませんのでその辺りを踏まえたくうえで読みください。

それではどうぞ!!

◇第6話「学校荒し事件!!・前編」

光 side

あれから僕はすぐにその場を立ち去った。

その場にいると変な誤解をされるに違いない、と僕の体が悟った気がした。別にそうだったことになった事は無いけど………
：なんか危ない気がした。

しばらく歩き、僕は無事家に着いた。だいぶ遅くなったようで、日はほとんど沈みかけていた。

光「お、遅くなりました……………」

美華・麗華「『遅い!!!!』」

光「ひいっ……………すいません……………」

ドアを開けると、そこには2人の鬼……

美華・麗華「『何か言った!!??』」

光「なッ、なんでもありません!!」

……………訂正、2人の女神がおられました。

美「はあ、光司君遅くなるなら言ってよね。心配したんだから」

麗「そうよ、美華ったらもうすこしで泣き出しそうだったんだから」

美「か、母さん／＼／＼！！」

麗「あら、これって警察とかに届けるべきなの！？」って慌てたのはどこの誰だったかしら？」

美「……………／＼／＼／」

美華さんは顔を赤らめて下を向いてしまった。どうやら本当に心配させてしまったようだ。
僕は心の中で後悔した。

光「美香さん……………ごめんなさい。でも、そこまで心配してくれていたなんて……………嬉しかったです。ありがとう」

美「ツ／＼／……………今度は私に言っておいてよね／＼！！」

光「はい、必ず言うておきます」

そう言うと、美香さん達はリビングの方へと戻っていった。僕も玄関から上がり2人についていくとあることを思い出した。

（あッ！！夕飯の事すっかり忘れてた！……………どうしよう……………
…これから作ったら遅くなっちゃうしなく……………）

そう思いながらリビングに入ると、ふといい匂いがしてきた。

光「あれ……………これってもしかして？」

美「それでも光司君が来る前は私が料理してたんだからね。さ、早く食べましょ」

目の前には既に温かい料理が並べられていた。その光景が、僕にはとても輝いて見えた。帰ってきた時、誰かが料理を作っていてくれるなんて、今まで無かったからだ。

光「は……………はい!!」

僕は久しぶりに意気揚々とテーブルへ足を運んだ。

光司 side out

三人称 side

一夜明け、いつも道理の朝を迎える。そして光司達は学校へと向かう。しかしこの時光司は知らなかった、既に学校では大変な状況だという事を……………

光「おはよう……………ってどうしたの？」

光司達が1年生教室を通りかかると、教室の一角が何やら騒がしい様子で窓の辺りに人だかりができ、何やら噂話をしているようだ。中には他のクラスや他学年の人間も混ざっており、事の大きさを物語っていた。

優「どうしたのって、それどころじゃない。学校荒しがガラスを割ったんだよ」

光「が、学校荒し!？」

勲「最近近くの中学でもあったことがあるんだが……………こいつは酷いな」

響「だね……………ガラスを全部わるなんて、悪い事の前触れでなければいいんだけど」

そう、この人だかりは教室の窓側のガラスが割れているためだった。

お陰で辺りには沢山のガラスが散らばっており、むやみに近づきすぎるものはいなかった。しかし光司は不思議に思った。どうしてガラスを全て割る必要があったのか、なぜこの教室だけなのか………光司はそれが気になった。

そしてしばらくすると先生達が警察を連れて来た。さすがにこれは学校側としてもこれ以上何かあっては学校の信用に関わるからだ。

「うーん………見たところ外部から何かでガラスを割られている様ですね………最初に発見した時の状況は？」

碧「はい………私が教室に入ると既にこんな風に………それで気が動転してしまってすぐに先生を呼べませんでした………」

碧が他の1年生に支えられながら警察の人の質問に答える。よほど衝撃の事だったようで答えるその声もどこか震えているようだ。

「そうですか………恐らく学校がしまってから進入して………犯行に及んだ、と言うところでしょうか」

「では、我々は周囲に不審な人物がいなかったかどうか聞き込みをしてきます。先生、一応この教室は立ち入り禁止にしてください」

先「わ、分かりました………」

そう言うと、警察はいったんその場を去り聞き込みへと向かった。そしてクラス一同もいったん落ち着き先生の指示にしたがっ

て別の教室に向かっていった。

しかし……………その様子を怪しく見つめる人物がいる事など、知る由もなかった……………

三人称 side out

光司 side

僕らはその教室から戻ってきたあと普通に授業を受けていた。しかし、その間も僕は学校荒らしのことについて考えていた。確かに警察の方々が捜査していると思うが……………職業上こういった事はどうも気になってしまう……………あ、今僕高校生だった。

そんな事を考えながら授業を受けていると……………

ピンポンパンポーン

放「2年A組、神谷光司君。今すぐ生徒会室に来てください。繰り返し………」

突然お呼び出しが掛かった、でも授業中なんですけど………と
言うかどうして生徒会なんか呼ばれるんだ？

光「あのお………これってどうすれば？」

先「とりあえず………行ってきなさい」

光「は、はぁ………」

僕は何だか分からないまま教室から抜け出した。授業中に抜け出す
なんて………何だか不思議な気分だな。

そう思いながら僕は生徒会室のある6階へと向かった。
生徒会室は前にみんなに案内してもらった時だけしか行った事が無
いし、何より入った事が無いから緊張してしまう。

光「………どんなところなんだろう………そして何の用なんだろう
………」

そしてとうとう生徒会室の前に着いた僕は扉をノックした。しばらく
くすると“どうぞ”と中から声がする………何かどこかで聞
いたことがあるような………

そして恐る恐る扉を開けると………

蓮「よう、光司。急に呼び立ててすまなかったな」

ば「でも光司君ならすぐ来てくれるとボクは信じてたよ！だって光司君はボクの『ああ、もういい。それよりこっちに来いよ』ブ〜」

光「れ、蓮先輩！！ぼたん先輩！！剣斗先輩！！ど、どうしてこんなところに！？」

剣「あれ、言っていなかったか？俺達生徒会のメンバーだったんだぜ。ちなみに言うと、蓮が副会長でぼたんが会計、俺が書記であそこに座ってるのが会長だ」

ドアを開けると蓮先輩、ぼたん先輩、剣斗先輩が出迎えてくれ、そしてもう1人……奥の椅子に1人の女生徒が背を向けて座っていた。

それは、昨日であつたあの女子生徒だった。どうりで聞き覚えのある声がしたと思った……。でも、これってやばいような……。……。

？「突然でごめんなさいね。そして初めまして、私は椎名薫^{しいなかおる}。青春^{こせい}の生徒会長をさせてもらってるわ。よろしくね……。……って、あなたあの時の！？」

振り返りながら先輩は自己紹介をしてそれと同時に僕と目が合ってしまった。不味い、これは非常に不味い……。……そう僕は本能的に悟った。だが時既に遅く……。……。

薫「……。……。／／／／／／／／／／」

蓮「ん？なんだ知り合いだったのか、って薫どうした！？」

ぼ「うゝんこれはきつと2人の間に何かあったに違い無いね。それ
もかおりんが顔を赤くするって事は……………はっ！！まさか光司
君！！」

光「違います！！何もないですって！！」

薫「あ、あれが何も無いですって／＼！！！」

光「ちょッ／＼！！誤解を生むような言い方は止めてください／
／！！」

剣「あははっ、やっぱりこいつは面白いやつだ。最初見たときから
そんな感じしてたんだよね」

光「先輩、そんなこと言ってる場合じゃありませんよ！！」

それからしばらくの間、僕は懸命に説明した。それはもう一所懸命
に……………

蓮「なるほど……………考えてみれば光司がそんなことするはずが無い
な」

光「そっか……………光司君は攻めより受けだったよね。そっかそっか
！！どっちかって言うとかおりんが手を出したって考えたほうが

自然だよね」

光「……………1人全然分かってらっしゃらないんですけど、大丈夫ですか？」

蓮「ああほっといても大丈夫だ。それより、本題に入ろう」

剣「そうだな、説明してやろうぜ」

薫「そうね……………あなたに来てもらったのは他でもないわ。学校荒しの件よ」

光「ッ！？……………やはり、そうでしたか……………」僕は先程から生徒会に呼ばれる理由を考えていた。しかも授業中に呼び出すなんてよほどの事……………最近起こった出来事でそれに該当するものといったら学校荒ししかない、と僕は薄々感ずいていた。

薫「その反応からすると……………やはり予測してたみたいね」

蓮「言ったら、こいつはきれるヤツだって」

光「恐れ入ります……………ところで、僕は一体何をすれば？」

薫「そうね……………とりあえず、学校内で何か不審な事が無いかチェックしましょう。それと聞き込みと学校内のパトロール、女子更衣室前の警備……………今はこんなところかしらね。あと、君には犯人逮捕に全力で協力してもらおうから」

光「……………わ、分かりました。それでは僕は授業に戻りますので……………」

薫「何言ってるの、あなたはこれから仕事するんだから授業なんて出てる暇じゃ無いでしょ」

光「……………はい？」

薫先輩の言葉に思わず耳を疑った。

授業に出てる暇がない？……………学生の本分って勉強のはずだよね……………？

蓮「そう言えば、光司はまだよく知らなかったな学校委員会のこと。実はな、学校委員会は学校内で起きたことには全部対処しなくちゃならないんだ。だから特別に授業に出なくてもいいことになってるんだ」

光「そ、そんな無茶苦茶な……………」

剣「頑張れ」

なんと言う委員会だ……………学校委員会。

僕はこの時改めてこの委員会のすごさを痛感した。

というか剣斗先輩本当に人事みたい……………

薫「そう言うわけだからお願い光司君。放課後になったら私も手伝えるから」

光「……………分かりました。これも皆のためですからね、誠心誠意やらせていただきます」

こうして僕は勉強そっちのけで学校荒しの対処をすることとなった。そしてついでに学校荒しを捕まえるのにも全力協力して……………
…僕が授業に出られるのは何時のことになるんだろうか……………

しかしこのときの僕はまだ知らなかった、この事件がこんなにもスピード解決するなんて

生徒会室をでた僕はとりあえず学校内の見回りをすることにした。
一時間目は体育の授業が無いため、更衣室の見張りはしなくていいらしい……………というか、僕が見張りをして大丈夫（女子ではないのか的な意味で）なのだろうかという疑問が浮かんできたんだけど、それは先輩曰く『「光司君なら」大丈夫よ』と自信たっぷりと言われてしまった。

……………どういう意味だろうか？
そしてそんなわけで、校内を見回ってるわけなんだけど

光「見回りって言ったって、先生と会うたび気まずいんだけど……
……………」

そう、学校を見回っているのは僕だけでなく先生方も何人か見回っているため、先生とばったり何てこともある。そしてその度に“ごくろうさん”とか“しっかりやれよ”など言われてしまっている。サボっているわけではないので怒られる事はないと思うけど先生に堂々とそういわれるとすごく気まずい……………」

光「はぁ……………こんなんでいいのかな……………」

そんな事を思いつつ、僕は気を取りなおして休み時間に入った事なので聞き込みをすることにした。見回りであんまり成果が上がらなかったものでこれに期待するしかない。

まずは一年生からあたってみることにする。

光「ごめん、ちょっといいかな、最近学校の回りで不審な人を見掛けたりしなかった？」

女子生徒A「い、いいえ／／……………と、特には／／……………（か、神谷先輩だ／／！！！！どうしたんだろ／／！！？）」

女子生徒B「べ、別に私たち／／……………そう言う人は見てないです／／……………（先輩と話せるなんて／／／、今日はついてる

かも／＼！！！）」

光「そっか……………ありがとう、また何かあったらすぐに知らせてね」

女子生徒A・B「『は、はい／＼／＼！！！』」

近くにいた女子生徒2人に話を聞き終えた僕は次の生徒に声をかけた。

……………なぜかその2人は終始顔が赤かったけど……………気にしないでおこう。

（※実は光司のことは金曜日のことや昨日の事でもう学校全体に噂が広まっている……………話の尾ひれが付き過ぎて……………でも実際とそんなに変わらなかったりする）

光「ちょっといいかな？」

薙「あ、先輩。……………どうしたんですか？」

ふと僕が声をかけた生徒は神薙だった。よかった、顔見知りの方が話が聞きやすい。

光「うん……………学校荒しについて今調べてるんだけど、なにか知らないかな？」

薙「学校荒し、ですか……………そう言えば、他の学校ではけっこう被害があつたそうですよ」

光「例えば？」

薙「像を壊したり、飼育されている動物を殺したり……………俺の知っている限りじゃそんなところです」

光「分かった、ありがとう神薙」

薙「じゃ、俺はこれで……………」

そう言うと、神薙は一目散に教室に向かつていった。そろそろ授業が始まる時間かな？次の時間は確か3年生のクラスが体育の時間だから見張りをしなくちゃ。

そして僕はその場を後にして更衣室前へと向かつていった。

光 side out

◇第6話「学校荒し事件!!」・前編（後書き）

この話は3つくらいに区切るつもりですのであと2つあります。
書いてる途中でめっちゃくちゃになってしまいかも知れませんが、暖かい目で見守ってください。

◇第7話「学校荒し事件!!・中編」(前書き)

中編がかなり長くなった気がします!!!

なのでその分今回は笑い半分、搜索と友情半分の内容です!!!

それではどうぞ!

◇第7話「学校荒し事件!!・中編」

美華 side

4時間目が終わり私たちはいつも通り屋上に集まった。でも授業が終わっていくらたっても光司君は姿を現さなかった。

最初のうちは学校委員会の仕事で遅くなっているのだろうとみんな思っていたんだけど、さすがに遅いと思い始めだんだん心配になってきた。

優斗「それにしても光司遅いな……………何かあったのか？」

美樹「確かに……………ちょっと心配になってきたな」

ジャンゴ「もしかして、学校荒しにやられたんじゃない？」

響「いや、光司のことだから……………何か危険なことに巻き込まれても大丈夫だとは思うけど……………」

ロン「ん、どういう事だ？光司はああ見えて強いのか？」

エール「まあ、強そうには見えなかったけど……………」

滯「あの顔で喧嘩が強いとなると……想像出来ないな……」

心配しながら話していると、いつの間にか光司君の強さの話題になった。

そう言えば、この5人はあの場にいなかったっけ……

あの時は私たちも啞然としたわ、実際に私は見た訳じゃないけど……相当凄かったに違いないわね。

もしかしたら、光司君の記憶と何か関係あるかも……？

圭「安心して。光司はああ見えて、想像してるより100倍強いと思うわ」

桜誇「では、いったい光司さんはどうしているんでしょう？」

美華「うーん、先生に4限目に光司君は何をしてたか聞いてみようか」

私がそう言って立ち上がると、同時にドアの開く音がした。

きつと光司君だと思い、ドアの方を見てみると確かに光司君だった………だけど、何だか顔が寝れていた。

何があったの………？

光司「や、やっと解放された……………」

勲「ど、どうした！？何があったんだ！！」

そして聞くとところによると……………

4限目、光司は女子更衣室に見張り役に駆り出された。4限目は3年生が体育の授業だったため、若干からかわれながら光司は見張っていた。

『ちょっとだけ見てみる？』とか、『別に見られても私達平気だよ』とか『光司君なら別に中で見張ってくれたって構わないわよ』等と言う甘い誘惑には耳も貸さず光司は仕事に専念した。

しかしそんな中、事件？は起こった。

4限目が終わり、体育の授業を終えた生徒達が更衣室に入りしばらくたった時……………

「『『キヤアアアアアア!!!!』』」

中から生徒達の悲鳴が聞こえた。それも1人ではなく明らかに複数のものであった。

光司はまさかと思い更衣室に入る。

そう、これが全ての始まりだった……………

光司「どうしました!? いったい何が!?!」

光司は冷静になって状況を確認する。

こういった非常事態の時はたとえ女子更衣室だろうと落ち着いて対応するものだ。

だが……………

先輩A「あっ、いや……………その……………」

先輩B「ほら言ったでしょ。あの子ならきつと来るって」

先輩C「さすが学校委員会ってだけのことはあるわね」

光司「こ、これは……………いったい……………?」

光司が困惑するのも無理はない、光司が駆け付け付けると感心されてしまったのだから。

先輩D「ごめんね、実はさっきのは冗談だったのよ」

光司「じよ、冗談!？」

先輩E「ええ。本当に何かあった時にあなたは大丈夫かしら? って思っちゃってね……………こうして試したってわけ」

光司「そ、そうだったんですか……………もう心配させないで下さいよ……………あれ? 何か大事な事を忘れてる気が……………」

光司は辺りを見回してみた。辺りにいるのは着替え途中の女子生徒ばかり……………それもそのはず、突然聞こえてきた叫び声に反応して光司はいそいで駆けつけたのだから。

そして緊張の糸が切れた光司はいつもの雰囲気に戻っていた。

したがって……………

光司「あや／＼……………でしたりや、ぼ、ぼっ、ぼっ、僕は／＼……………こ、こっ、こっこれで／＼……………」

光司は自分の置かれている状況を理解し、顔をいつも以上に真っ赤にさせながら後退りする。

光司は女性に極端に弱い、年上となると更に弱くなる。更に着替え中ともなると……………もうダメだ。

そしてこういうのを見ると弄りたくなるのが人というもの……
……

先輩A「あら、どうしたのさっきから？ 顔が真っ赤よ」

先輩B「もしかして、緊張してるの？」

小悪魔的な笑みを浮かべながら少しづつ詰め寄ってくる先輩達。普通の男性なら飛び上がって喜びそうな状況だが光司にとってはこれほど危機的状況はものはない。

そして光司もそれにつられ更に後退りする………すると、後ろのほう方で“カチッ”と言う音がした。

無論これは………

光司「ッ！？ み、みなさん／＼！？」

先輩C「ごめんね、でも君になら見られてもいいんだし♪」

先輩D「そうそう。なんか男子に見られたって気にならないし♪」

光司「そ、そんな／＼………」

そして光司はこのあと不審に思った先生に助け出されるまで地獄？の時間をすごしたのだった。

……………と言う事らしいわ。

（（（（（弱いものあったな……………（（（（（

その場にいた全員がそう思ったでしょうね。

勲「くそお……………なんとうらやましい事か……………」

ロン「そう……………なのか？」

圭「心配しないで……………このバカだけよ……………」

光司「まあそんなことより、みんな学校荒しについて何か知らない？」

光司君はこんな時でも学校委員会として仕事をするようだ。本当に真面目な人ね、けどそれが光司君のいいところでもあるんだけど、無理はしないで欲しいわね。

美樹「そうだな……………俺が聞いた話だと、下着とか体操着が盗

まれたって聞いたぞ」

優斗「そうか？……俺が聞いた話では学校自体に被害が出た話が多いけどな」

桜誇「その後……服はどうなったんでしょうか………？」

エール「恐らく………今も学校荒しが持ってるでしょうね………」

滯「うう………想像したくないな………」

光司「ふんふんなるほど………」

光司君はみんなの話を聞きながらメモを取っていた。これじゃ警察とやってることが変わらないけど………なんだか様になるわ。

響「そうなんだ………僕が聞いた話では教室の縦笛とか、シューズとか………色々なくなってたみたいだったけど」

ジャンゴ「それはそれで気味が悪いが………」

光司「もしかしたら、一概に学校荒しの仕業と断定するのは違う気がするな………」

美華「と、言うത്？」

光司「つまり、それぞれの学校で起きた事件が全てその学校荒しによるものだと決め付けるのは早いんじゃないかって事。考えられる

のは、それぞれの犯行は別々の犯人によるものか、はたまた学校荒しではない人物が犯行に及んでいるかのどちらかな。理由としては、全ての犯行があくまで学校側に何らかの被害を被るものなんだけど、個人的な欲求目的の犯行と金銭的な負担を強いるための犯行に若干の違いがあるからなんだ。無論、これは僕の勝手な推理だけどね」

勲「おお……………何だかすげえな……………」

勲君を初め、私たちは光司君の話に聞き入ってしまった。彼は本当に高校生なんだろうかと言う洞察力と言うかものの考え方と言うか……………まるで名探偵コ〇〇みたいね。

すると、ちょうど昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

桜誇「あ、チャイムが鳴ってしまいましたね……………確か次の授業は体育でしたか……………」

ジャンゴ「あ、僕らも次の授業は体育だったような……………」

美樹「おっとうしちやいられない、早く行こうぜ!!」

美華「じゃ、じゃあ光司君頑張ってね」

私たちは光司君に別れをつけ、急いでお弁当を片付けて次の体育の授業のため更衣室へ急いで向かった。

でもこのとき、まだ私たちはあんな事になるなどと思いもしなかった……………

美華 s i d e o u t

光司 s i d e

あれからみんなと別れたあと、僕は早々と昼食を済ませ職員室へと向かった。本来ならば更衣室の見張りをしなければいけないところなんだけど……………前のこともあってか何だか気が進まず、先生方をお願いした。

そして僕が職員室へと向かったのは学校荒しについて情報を得るためである。先生方のほうが何かと情報が集まって言うだろうと僕は考えた。

光司「失礼します」

瑞穂「あら神谷君、どうしたの？」

職員室のドアを開けると瑞穂先生が出迎えてくれた。職員室は学校荒し対策の見回りのせいかな、やはりいつもより先生方が少ないようだった。

光司「はい、学校荒しについてお話をお伺いしたいと思ひまして」

瑞穂「そのことね。うーん……………近隣の学校から色々話を聞いてるけど、未だに目撃者はいないのよね……………犯行も様々だし……………正直困ってるのよ」

光司「そ、そうですか……………」

これを聞いたとき僕は正直困った。これほど情報が無いとは思ひもしなかったからだ。

（特徴も分からないんじゃないかな……………）

僕は若干気を落としたが切り替えて次の質問を試してみた。

光司「あの、昨日の宿直の先生ってどなただったんですか？」

瑞穂「えっと……………確か、教頭先生じゃなかったかしら……………！？そうでしたよね？」

先生A「ええ、確かそうでしたね。でも、教頭先生は異常は見当たらなかったって言ってましたけどね」

これを聞いて、僕はまた気を落としてしまった。これでは振り出しに戻ってしまったものだ。

だけど、このとき僕はあることが引っ掛かっていた。

(あれ?……………確か、あの時は……………)

僕が考えを巡らせていると、こんな話が聞こえてきた。

先生B「そう言えば、教頭先生お金に相当困ってらしてましたね。先週もお貸ししたばかりだと言うのに……………」

先生A「ああ、私も昨日懇願されてしまって大変でしたよ」

話を聞いてると、そんなにお金が無いものかと僕は最初耳を疑った。教頭先生は確か今年からこの学校に転勤してきたらしくちよつとかしい気もしたが、何にしてもこの件にはあまり関係ないのでは、と思い詳しくは聞かないことにし僕は次の目的の場所へ向かった。

11A教室

僕は問題の11Aの教室にやって来た。

朝から封鎖線が張られ、教室には誰も足を踏み入れていないためガラスが散乱したままだ。

そして僕は封鎖線を踏み越え教室の中へと足を踏み入れる。

幸い、青春は上履きを履いているのでガラスの上でも歩き回ることができる。

光司「しかし酷いな……………」

教室のガラスはすべて割られ、机や椅子等も倒れていたり曲がってしまっているものが多数あった。

僕は慎重に窓の方へ近付いてみる。

光司「とくに変わった様子は……………ん？」

僕はガラスの破片の上にあるものを見つけた。それはボールペンのように名前は書いてなかったけど、変わりに“青春高校創立17周年記念”とかかれてあった。……………なんと中途半端な数字だろう。とりあえず、僕はこれを証拠物件Aとして回収した。

光司「さてと……………他に何かないかな」

そう思い僕は周りを見渡すが、もう特に変わったものは何も無かった。そして僕が教室から立ち去ろうとすると……………

「
「
「
『キ
ヤ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
！
！！
！！！
！！！」

」
」
」
」

ただ事でない叫び声を聞いて今度こそ本物だろうと僕は確信した。なぜならこの時間は2年生、しかも僕らのクラスが体育をしている、と言う事は美華さん達が先程の話をしてくれていると思うからさつきみたいな事は恐らくない。したがってこれは本当に驚いた叫び声と言う事である。となれば……………

光司「ツ！？こんな時に！！」

僕は悲鳴が聞こえてきた3階へと急いだ。着くと、そこはすでに人だかりが出来ていてやはり何か起きたようだった。

光司「ごめん、ちよつと退いて!!」

僕は慌てて人混みを掻き分け更衣室の方へと足を進める。

すると、ロッカーが開け放たれたまま立ち往生しているクラスの女子達の姿があつた。

美香「あ、光司君……………」

美香さんが僕の方に気が付くと他の人もこちらに気が付いたようだ。
見たところ、誰も怪我とかはしてないようだ。

光司「美香さん、いったい何が……………」?

美香「じ、実は……………」

光司「じ、実は……………」?

美香「……………」わ、私たちの制服が1つ残らずないの!!」

光司「なっ、何だって!？」

なんと言うことだろうか。

とうとう学校荒しの被害が出てしまった。

こんなことになる可能性が無かったわけではない、だけどそれがわかっていただけに防ぐことが出来なかったのは凄く悔しい。

光司「すみません……………」僕が見張りをするのをためらわなければ……………」

桜誇「いいえ、光司さんのせいではありません」

圭「そうよ、誰もあんたを責めてなんかいないわ」

エール「その通り。それより、次にどう行動するべきかよ」

滯「いつまでもくよくよするな。お前は男なんだろう」

光司「そ……………そうですね。今は犯人の情報を掴むことが先決です
ね！」

（そうだ、今は一刻も早く制服を見つけないと）

僕は気持ちを切り替えて自分を落ち着かせた。

こう言うときは、怪しい人物を見かけなかったかどうかの確認だ。

光司「だれか更衣室から怪しい『そんな人物はいなかった』ッ！？
……………教頭先生……………」

僕の声を遮ってそう言い放ったのは教頭先生だった。おそらくは先生が更衣室の見張りをしていたため自信があるのだろう。

教頭「とにかく、制服は私と神谷で探す。あとの者は授業に行きな
さい」

教頭先生は厳粛にそう言い放つと群がっていた生徒達を授業に向かわせ、僕と一緒に更衣室に入った。

教頭「まずはロッカーを調べる。私は向こうから、神谷はそっちら始めてくれ」

光司「わ、分かりました」

僕は少し教頭先生の勢いに押されつつ搜索を始めた。

（なんだか、焦っているように見えるのは気のせいなんだろうか………？）

その後、僕たちは1つ残らず調べた。だけど、制服はおろか何一つ見つからなかった。

光司「………いったいどこにあるんだ………これだけ探したのに」

教頭「………仕方がない、ここは後でもう一度探すとして、校内を見て回るぞ。まだ犯人が校内にいるかもしれない」

光司「………はい」

僕は教頭先生に言われるがまま更衣室を退出した。

（何だろう………何か引っ掛かるような………）

僕は心の中に違和感を感じながら見回りへと向かった。

光司 side out

三人称 side

光司「……………はぁ……………」

あれから時間は経過し放課後。あれから光司は学校中を探し回ったが、怪しい人物を見つけるにはいたらなかった。

そして光司は深いため息をつきながら教室に戻ってきたのだった。下校時刻が近いため教室には誰もいなかった。そして、誰もいない教室に入り自分の席へと座る。その顔は明らかにいつもより元気が無い。

光司「……………何が学校委員会だ……………結局、何の解決にもなっていない……………」

光司は今日のことと悩んでいた。学校委員会である自分がその場になかったとは言え、どうしようもないもどかしさが心に深く残っ

ていた。しかも、学校中を探してもまったく何も出てこなかった……これを自分の失態といわずにどう言おうか。

光司「……………」

光司は1人窓を見ながらたそがれていた……………そんな時だった。

薫「もおこんな所にいた!! 探したのよまったく!」

ドアを勢いよく“ガラッ”と開けて薫がやってきた。彼女も彼女で学校内を搜索していたのだった。だが彼女の方も収穫はゼロだった。

光司「……………すいません……………」

薫「……………どうかしたの? ひょっとして、今日のこと?」

光司「……………」

薫の質問に無言の肯定で答える光司。それに対し、薫は光司に近づくことなく静かに言った。

薫「……………確かに、気持ちが分からないわけじゃないわ。でも今やるべきことは、そうやってたそがれてる事じゃないと思うけど?」

光司「そうなんですけど……………何だか……………」

薫「はあ、そんなんじやこの人達に申し訳が立たないんじやないの?」

光司「ッ!?!」

薫が反対側のドアを開けると、そこにはいつもの男子メンバーがいた。みな、なんだかんだで光司の手伝いがしたかったのである。

光司「みんな……………どうして?もうとっくに帰ってるはずなんじゃ……………?」

優斗「みずくさいぞ光司、俺達にも手伝わせてくれよ」

ジャンゴ「そうそう、僕ら放課後ぐらいしか手伝えないんだから」

勲「言っておくが、俺は忘れ物を取りに来ただけだがな!」

響「見え見えの嘘だね。いつも置き勉してるくせに」

勲「うっ！……………」

ロン「まあ、そう言うことだ。みんなお前の力になりたいんだよ」

美樹「さあ、俺達は何をすればいいんだ？早く始めないと暗くなるぜ
！！」

光司「み、みんな……………」

光司は言葉にならない熱いものが込み上げてきた。

そして元気が無かった顔が明るくなり、いつもの彼に戻る。

薫「これでもまだ、そうやっている気？」

光司「……………いえ、僕は忘れてました。僕には、こんなに素晴らしい仲間がいたことを……………みんな、手伝ってくれる！？」

一同「『『『もちろんだ！！！！』』』」

そして光司は仲間と共に聞き込みのため町へ繰り出していった。

夕日に照らされたその姿は、彼らの絆を表すかのように輝いていた。

そしてこれが、後の事件解決に大きく関わる事など彼らは知るよしもなかった。

三人称 side out

◇第7話「学校荒し事件!!・中編」(後書き)

何だかすでに犯人が分かって頂けている気が……………

そして後半には多分全員が登場するかも!?

それではお楽しみに!!

◇第8話「学校荒し事件!!・後編 part 1」(前書き)

かなり長くなったので二つに分けました!!

まずは前編どうぞ!!

◇第8話「学校荒し事件!!・後編part1」

三人称side

あれから、光司達は周辺住民に聞き込みをして回り情報収集をした。そしてここで新たに分かったことがある。

周辺住民の話によると、三日ほど前にフードを被った怪しい人物を目撃したり、学校の回りを妙にウロウロしている人物が目撃された………しかし、ここ数日はめっきり姿を見せていないらしい。

光司はこれを聞いて何か分かったような笑みを浮かべた。その真意は定かでないが、何か事件の事が理解できたようだった。

そして次の日

光司side

事件の日から一夜明け、僕は少し早めに登校した。昨日の聞き込みの事を確かめるためだ。

「……………ふんふん、なるほど……………」

僕は学校の“ある場所”を調べて回った。そこには思った通りの物が残っていた。

「……………だとすると、勝負は4時間目か……………」

僕は朝方の誰もいない廊下で一人呟き、決意を新たにするのだった。

光司 side out

三人称 side

光司が登校してから時間は経ち、一組や二組の生徒も次々と登校してきた。そしてその姿は昨日制服を盗まれたにも関わらず、いつもと同じように制服を着こなしていた。
もちろんこれに光司が驚かないはずがない。

光司「み、みんなどうして！？制服は盗まれたはずじゃあ！？」

美香「その事なら心配無いわよ。昨日、保健室の先生から借りたの」

光司「かつ、借りた！？」

そう、青春には万が一の時のために制服が100着は完備されている。ちなみに女子の制服だけで男子の制服は1着も無い……………理由は校長いわく“だって女子の制服がかわいいんじゃないもん！！”らしい。

全くもって意味が分からないが、とにかくそう言う事らしい。

勲「で、昨日のアレは何だったんだ？いい加減教えてくれよ！」

ジャンゴ「確かに、昨日の聞き込みで怪しい人物が目撃されたみたいだけど……………これといって有力な情報ではないと思うんだけど？」

ロン「しかも、ここ数日はめっきり姿を見せてないんだろ？いったい何が分かったって言うんだ？」

昨日の聞き込みで一人だけ分かったような顔をしていた光司に対し、問いただそうとするメンバー。

だが、光司の答えは“4時間目が終わったら教えてあげるよ”の一点張りであった。

優斗「4時間目って確か……………数学？」

エール「こっちは確か……………英語だかしら？」

1組2組共に4時間目の時間割を確認するものの、特に不自然な科目ではない。それに光司は授業には出無いので、4時間目にいったい何があるのかまったく分からなかった。

光司「まあ、4時間目が終わる頃になったら分かると思うよ」

「同」

やはり光司の言葉は理解できなかった。

そして一同はとにかく4時間目が終わる頃になるその時間まで待つしかないのだった。

そして、4時間目がそろそろ終わる頃合いの時間………事態は急変した。4時間目、その時間は実は1年生の体育の時間で、光司はこれを知っていた。

そう、この時間にも学校荒しは盗みに来ることを予測して……………

そして……………ついに事件の火蓋が切って落とされた。

「『『『『キャアアアアッ！！！！』』』』」

すると、先日と同じように更衣室から悲鳴が聞こえた。

当然、美香達はこの事かと急いで行ってみると、更衣室の扉は開け放たれ体操着のままの1年生達が驚いて立っていた。

響「どうしたの！？もしかして、また制服が盗まれた！？」

碧「か、神迫先輩……………じ、実はそうなんです…………」

ロン「ってことは、まんまとしてやられたわけだ…………」

美樹「しかしだな、あいつ光司の言っただ事はこれなのか？だとしたら、あいつが何の対策も取らないはずが…………『その通りだよ』こ、光司！？今までどこにいたんだよ？」

光司は野次馬の中を掻き分けて更衣室の扉の前につた。その顔は何やら自信に満ちているようで、少し口もとが微笑んでいる。

桜誇「光司さん、これはどういう事なんですか!？」

「その通りだ!! また盗まれてしまっているぞ!!」

光司「すみません、でも心配しないでしょ。僕の推理が合っているなら、犯人も制服も、まだ更衣室のどこかにあるはずですから」

「ええええつ!!??」

これにはその場にいた全員が驚いた。盗まれた現場にまだ犯人も制服もあると言うのだ。

そんなことあるはずが無いと誰もが思った。そして、そんな雰囲気の中光司の推理が始まる……………

光司「まず、昨日の事件のことを振り返ってみましょう。盗まれたと分かった後、僕と教頭先生が調べましたがロッカーの中には何も無かった。そう、ロッカーの中にはね……………」

光司は徐に更衣室に入っていき歩きながら話し始めた。更衣室にはロッカーの他に、奥にシャワー室やトイレや洗面台など色々あった。

光司 「あの時僕たちはロッカーばかりに気を取られていて、こうい

ったところには気が回らなかったんです……………」

美華「まあ、そうかもしれないけど……………それでどうして更衣室に犯人も制服もあるなんて言えるの？」

美華の言うことももつともだった。確かにロッカーしか探していなかったとはいえ、更衣室に犯人がいるなどと言う確証はどこにも無い。

しかし、光司にはそれを確定する根拠があった。

光司「確かに、犯行があった現場にいつまでもいる馬鹿な犯人はいませんからね。だからこそ、犯人はここにいるんですよ……………」
……………普通の考えを逆手にとってね」

勲「だから、その自信はどっから湧いて来るんだよ!？」

優斗「落ち着けて勲。光司にはその確たる証拠ってのがあるんだろう。俺達にも分かりやすく言ってくれよ」

痺れを切らした勲をなだめる優斗。そして、どうやら周りのみんなも勲と同様その根拠を聞きたがっているようだった。

光司「その根拠はね、2つあるんだ。1つは昨日みんなで近所の人達にして回った聞き込みさ」

ロン「昨日のあれか?でも、そんな根拠になりそうな証言なんて得られたか?」

ジャンゴ「確か……三日ほど前にフードを被った怪しい人物を目撃したり、学校の回りを妙にウロウロしている人物が目撃されたけど、最近は姿を見せない………だったよね。これのどこが………待てよ………」

光司「気づいたみたいだね。そう、ここ最近姿を見せなかったという事はどこかに潜伏あるいは町から逃亡したと考えられる。昨日事件が起こったと言う事は町から逃亡したというのは無い、という事は前者つまりまだどこかに潜伏してるってこと」

圭「でもちょっと待って、確かに今また盗みが起こったけど………：………どうして光司は起こる前から学校（こい）にいるなんて事が分かったのよ？」

確かに、光司は朝まるでこうなる事を予測していたような口ぶりだった。それは、光司が今日早めに登校してきたことによって明らかになったのだ。

光司「それは………今日の朝に“ある所”を調べてみて分かったんだ」

澪「ある………場所？」

エール「それって？」

光司が言ったある場所………それはその場の全員が思いもしていなかった場所だった

光司「今日の朝、僕は学校に早めに登校してその場所を調べて回ったんだ。すると、こんなものを見つけたんだ」

そう言って、光司はビニール袋に入れられたカップ麺の空の容器を取り出した。

無論、これは後に警察に証拠として提示するため指紋を付けないようにするためだ。

美樹「その空のカップ麺の容器がどうしたんだよ。別に不審なことはないんじゃないか？」

光司「確かに、普通にこれが捨ててあったなら何の不審も無いけど、見つかった時間と場所がどうも不自然なんだ」

神薙「時間と場所……………ですか？」

光司「そうなんだ、これは今朝玄関近くのゴミ箱の中から見つけたんだ。たしか放課後は掃除をしてから帰るから、ゴミが残っている事なんてあり得ない。ゴミを捨てなかっただけでも取れるかもしれないけど、ゴミ箱にはこれしかなかった。つまり、昨日ゴミ捨てをした後誰かが捨てたとして考えられないわけさ。

そしてさらに宿直の先生に聞いてみたんだけど、カップ麺が1つ無くなっていたらしい。確認を取ったらこのカップ麺の容器に間違いない……………ここで、他の先生方が食べたのではないかと思われるけど、先生方は誰一人知らない。つまり昨日こんなことが出来たのは、誰にも気付かれずに学校に隠れていた学校荒らだけってこと

これには全員が納得せざるを得なかった。その理路整然とした推理に誰もが聞き入ってしまった。しきり。

しかし問題はまだある、
 いったい青春のどこに学校荒らしが隠れているのかと言うことだ。

光司がどこから探していこうかと歩き回っていたその時だ。

“バンッ！！”と激しい音と共にシャワー室のドアが開き、そこからフードを被った人物が勢いよく出てきた。それは紛れも無く学校荒しだった。

光司は丁度別の方向を見ていたため飛び出す学校荒しに反応するの
が遅れてしまった。そしてその僅かな間に学校荒しは逃走に掛かる。

学校荒しは懷からナイフを取り出し大声を出して生徒を脅し、一目散にその場を離れた。光司もすぐに追おうとしたが、パニックになった生徒であたりはごった返し前に進めない。

すると、ここで何人かが真っ先に学校荒しを追いかけていった。他ならぬ優斗達だ。

優斗「光司、ここは俺達に任せろ!!」

ジャンゴ「光司は後から追いついて!! もっとも、その頃には捕まってると思うけどね!!」

ロン「そう言うことだ!! ちゃんと後から来いよ!!」

優斗、ジャンゴ、ロンの運動神経良い組がすかさず犯人を追いかけた。ところがこの犯人なかなか早い、生徒を避けてスルスルと逃げていく、優斗たちの方は足はそれこそ速いものの、昼のこの人が一番多い時間に人を追いかけるのは用意な事ではなくなかなか追いつけずにいた。

ロン「くそっ! あいつ意外と早いな!!」

ジャンゴ「感心してる場合じゃないけど……何とかして捕まえな」と」

優斗「でもこんなに人が多いんじゃ、追いつけないよ!!」

しかしここで3人はあることに気が付く。

（（こいつ……元の場所に戻って行っていないか……?））

そう、学校荒らしは逃げているにも関わらずなぜか更衣室の方に戻

って行っているのだ。

不信に思いながら3人は学校荒らしを追い続ける。

そして更衣室のある階に着くと、そこには先ほどまでの野次馬の生徒はめっきり減っていた。

その代わり、その場には複数の男女が立ち塞がっていた。

学校荒らし「どけええええええ！！！」

学校荒らしはナイフを振り回しながら脅した、がそれでも彼らは退かなかつた。

それどころか、完全に無視している……………どうやらこれが学
校荒らしを怒らせたようだ。

学校荒らし「どけて言っただよおおおおお!!!」

学校荒らしは先ほどにも増してナイフをでたらめに回しながらスピードを上げて突っ込んできた。

すると手前にいた女子生徒……いや、男子生徒が少し前に出て扉に寄りかかった。

神薙だ。

「……てい」

学校荒らし「っ!?!うおっおっと!!!」

学校荒らしは神薙が不意に出した足に引っ掛かり転びかかった。
するとすかさず何人かが動いた。

その手にはなぜか竹刀を持っている……………上泉兄弟だ。

剣斗「漣、上手く合わせろよ!!!」

漣「誰に言っているんだ兄上……………いくぞっ!」

剣斗「おうっ!」

剣斗・漣「胴っ!!!!」

威勢の良い掛け声と共に学校荒らしの腹部に2本の竹刀がめり込む。
さらに、学校荒らしは倒れかけていたのでダメージはかなり大きい。

学校荒らし「ぐっ!!!……………ぐふうっ!……………」

あまりの衝撃にその場にへたり込む学校荒らし……………しかし、
これで終わりではなかった。

殺屠「終わりじゃねえぞ……………歯食いしばれっ!!!」

学校荒らしの目の前に立った殺屠は、垂れ下がっていた頭にアップ
ーを食らわし文字通り殴り飛ばした。

そして、学校荒らしはそのまま動かなくなっていた。

光司「あらら……やりすぎちゃいましたね」

殺屠「殺りすぎか？……まだ殺り足りないぞ」

光司「……………これ以上やると事情聴取に支障が出ますので……
……」

殺屠「ふん、そうか……………それでは俺は行くぞ。また何かあつ
たら呼べ、じゃあな」

そう言い残すと、殺屠はスタスタと行ってしまった。そして殺屠を
見送った光司が学校荒らしの方を振り向くと……………

ぼたん「学校荒らしめ！！めし取ったりー！！」

蓮「お前はなにもしてないだろ！」

ぼたんが堂々と気絶している学校荒しを足蹴にして、勝ち誇ってい
た。そして蓮が冷静に突っ込む……………

美樹「いや蓮先輩、もっと何もしてないやつが1人……………」

そう言いながら美樹が指差す先には……………」

勲「……………よ、よし、俺の作戦通り……………」

何人かの影に隠れている勲の姿が……………」

優斗・ジャンゴ・ロン「『……………』」

そして後で追いついてきた3人は一部始終を見て唖然としていたらしい。かくして、学校荒らしは見事に捕まりましたとさ。

しかし、まだ全てが終わったわけではなかった……………」

三人称
s i d e
o u t

◇第8話「学校荒し事件!!」・後編 part 1」（後書き）

後編も光司が活躍します!!そしてあの人が登場……………

◇第9話「学校荒し事件!!」・後編 part 2」(前書き)

後編です!!

何だかやっぱり名探偵コ○○ッぽくなっています……………

それではどうぞ!!

◇第9話「学校荒し事件!!・後編 part 2」

光司 side

みんなの協力もあって無事に学校荒らしを捕まえることが出来た。しかし不思議なことに、昨日盗まれた美香さん達の制服を盗んだことだけは否認しているらしい。警察の方の話では“どうせ罪を軽くしよう”と嘘の供述をしているんだろう”とのことだった。

響「それにしても、鮮やかな逮捕劇だったね。たまたま学校荒らしが更衣室前に戻ってきたところに、みんないたなんてね」

優斗「確かに、すごい偶然だよな」

エール「えっ何? 2人とも知らなかったの?」

ジャンゴ「何って、何のことエール?」

ロン「その口だと、何か知っているみたいだな」

あ、そうか……あの事話してないんだった。

僕は先ほどの事を伝えていないメンバーに説明した。

実は先ほどの逮捕劇は作戦で、まず学校荒らしが逃亡したら数人で学校荒らしを追いかける、次に各階に配置した生徒が脅されるフリをして上手く更衣室まで誘導する、そしてあらかじめ伝えておいたメンバーが更衣室前に集合して一気に捕まえるという作戦だった。

これには最初の追いかける人が重要で、僕はあえて男子陣には伝えていなかった。きっとあの3人が追いかけるだろうと信じたのだ。

桜誇「そう言う訳だったんです。まさか知らされていないとは思いませんでした」

圭「まあ、そのおかげで成功したとも言えるんだけどね」

ロン「なるほど、“敵を欺くには味方から”ってやつか」

美樹「それで光司はあの時俺を止めたんだな。どうせ学校荒らしが戻ってくるのを知ってたから」

エール「でも、どうせなら私も参加したかったわ。一発くらい入れてやりたかったもの!!」

美香「それは私も同感ね。何だか気が済まないわ!!」

話していると、だんだん女性陣から沸々と怒りのオーラが見えた。なんだか生半可なさっきより凄いやうな……………

男子一同「『『『『……………女って怖いな……………』』』』」

そして僕らは揃ってこう呟いた。

でも学校荒しと言えば、僕にはいまひとつ腑に落ちない事があった。それは昨日のガラスの事だ。今回の犯人が、わざわざ“学校荒し”と言う自分の存在を知らしめる行動をするだろうか？学校に隠れているのなら、尚更調べられては大変なのに………それにあの場所を感じた不信感………いったい何なんだろうか？

僕は心にモヤモヤしたものを抱えつつ、みんなと一緒に教室に戻った。

光司 side out

薫 side

学校荒らしが光司君のおかげで捕まったその日の放課後、私は生徒会の仕事を済ませ応接室向かった。

なぜか、ある先生に応接室に来るよう言われてしまった………
いったい何の話かしら？

薫「失礼します」

私はノックをして応接室へと入る。すると先生は既に来ていて椅子に腰掛けていた。

薫「いったい何のお話でしょうか、教頭先生？」

そう、ある先生とは教頭先生だった。

教頭先生とは入学式の時に顔を見たくらいで、面識は無い。それなのに話なんて……………

私は若干戸惑いながらも教頭先生の近くに立った。

教頭「ああ、よく来てくれたね椎名君。折り入って話と言うのはね……………」

そう言うと、教頭先生は徐にカバンから何かを取り出した。

それはキラリと光る刃物だった。

私は咄嗟に下がろうとしたけど……………

教頭「動くなっ!!」

教頭先生は刃物を既に私の方に突き付けていた。
そして刃物を私に向けながらゆっくりと動き出す。

教頭「安心したまえ、ただ、私の言うことを聞けばいいのだよ」

先生は怪しげな笑みを浮かべながら応接室のドアを閉め鍵をかける。
応接室は入り口が1つなので私は完全に閉じ込められてしまった。

椎名「……………てっきり真面目な方だと思っていたんですが、私の勘違いだったようですね……………」

教頭「それはすまなかったね。……………だが大人なんてものはそんなものさ、真面目なだけでは生きていけないことを痛感し、バカを見るのが落ちさ」

薫「それで、いったい何が目的何ですか？」

私は少し怖かったけど勇気を出して聞いてみた。
こういった状況下だと弱気になりがちだけど、持ち前の正義感が働いてなんとか聞くことが出来た。

教頭「君は知らないと思うが、青春は全国でもかなり有名な学校でね、マニアの間ではかなりの高評価らしいんだよ」

薫「……………は？」

私は最初この人が何を言っているのか分からなかった。

（マニアの間で高評価？……………さっぱり訳が分からないわ……）

教頭「知らないようだから教えておこう、簡潔に言う青春の制服は金になるんだよ、それもかなりの額にね」

これを聞いた瞬間、私は背筋がゾツとした。確かに世の中には色々な趣味を持つ人がいてもおかしくないけど……………

そこまで思って私はハツとした。ここまで聞くと先生の目論みが分かってしまったからだ。

私は思わず先生から距離を取って後退りする。

教頭「その様子だと分かったようだね……………私の望みが」

そう言いながら一步一步こちらに近付いてくる先生。その表情は何

時もの真面目そうな顔とは全く違い、まさに犯罪者の目のようだった。

教頭「暴れないでくれよ、大事な制服しょうひんを傷付けたくない。……………
…大丈夫、ただ制服を取るだけだから……………」

薫「そ、そんなことをしてただで済むわけ無いでしょ!!」

教頭「心配はない、証人が死んでしまったら誰が証言をするんだい……………」

瞬間私は思わず動けなくなってしまった。
今になって急に恐怖心が私を支配したのだ。

(どうしよう……………私、殺されるの……………? そうだっ! 誰かがまだ……………)

教頭「無駄だよ、もう学校に残っている生徒は1人もいないはずだ……………何せ私が職員会議で提案したんだからね」

私はまだ誰かが学校に残っているのではと思った……………けど、すぐに諦めた。

今日は光司君が学校荒らしを捕まえみんな安心しきっていたけど、念のため早めに下校するように言われたのをすっかり忘れていた。

薫「い、嫌……………」

私はもう声も出ないほど追い詰められていた。

（お願いだから誰か来てっ！！！！）

私は心の中で思いきり叫んだ。やっぱり、誰も来やしないと思った……………

でも

??? 「やっぱり、僕の勘は正しかったみたいですね……………」

応接室の扉をゆっくりと開けて、その長く綺麗な髪を靡かせながら“彼”はこちらにやって来た。

一見すると女の人の様な“彼”が……………

薫sideout

三人称side

突然応接室の扉を開いて現れたのは、長い金髪を揺らして女性のよ
うな顔立ちの生徒……………他ならぬ光司だ。

光司「やはり、2年生の制服を盗んだのはあなたでしたか、教頭先
生」

教頭「神谷……………か。何の事だ？」

教頭は持っていたナイフをサッと隠しながら光司の方へ振り向く。
その顔は、先程の事など微塵も感じさせないような表情だ。

光司「隠しても無駄ですよ。先程の会話も聞きましたし、何よりあ
なたの行動は今思えば不可解だった。まあ、先生が犯人であるはず
がないと言う先入観が働いてしまったのは皮肉な事実ですが……………
……………そして、あなたは他にも罪を犯している」

教頭「ほお、何の罪だ。言ってみろ」

教頭は自信満々の笑みを浮かべながら聞き返す。

しかし光司はその笑みに動じることなく話し始めた。

光司「分かりました、では簡潔に申しましょう……………一昨日の夜、1年生の教室の窓を割ったのはあなたですね？あなたは最近出没している学校荒らしの仕業に見せ掛け、この犯行に及んだ……………違いますか？」

教頭「なかなか面白い推理だが、それには証拠がどこにもないぞ。それでは犯人を逮捕できないんじゃないか？」

光司「では証拠をお見せしましょう……………これです」

そう言って光司は懐からあるものを取り出した。

それはどうやらペンの様で、昨日光司が事件現場で見つけたものだった。

光司「他の先生方にお伺いしたところ、これはこの学校の創立記念の万年筆で先生方しかもってらっしゃらないとか……………そして他の先生方は全員持ってらした。教頭先生、あなたを除いてね」

教頭「……………確かに私はその万年筆を持っていない。だが、その事がガラスの件とどういった関係だ？」

ここに来て尚も言い逃れようとする教頭。おそらくどこまで行ってもしらを切り通すだろう。

光司「あくまでしらを切るつもりですか……ですが、これは散乱したガラスの下にあったんです。つまり、宿直の見回りの時に乗じてあなたがガラスを割ったと言う決定的な証拠なんですよ！」

光司は少し声を粗げていい放った。それには、もういい加減に罪を認めて欲しい願望もあった。

教頭「それは、私が見回りをしている時に偶然に落ちたとは考えられないか？その後で学校荒らしがやったんだろう」
しかし、教頭は断固として罪を認めようとはしなかった。彼の方も意地でも隠し通してやろうという魂胆だろう。

光司「……………では逆にお聞きしますが、一昨日の見回りの際に何か変わった事はありませんでしたか？」

教頭「いや、特に不審なことは何1つ無かった。どうだ、これでも私が犯人だとも言うのか？」

光司「……………教頭先生、今の発言で確信しました。犯人は、やはりあなただということがね……！」

教頭「なっ!？」

これには流石の教頭も驚いた。それもそうだ、無実どころか犯人扱いされるとは思いもなかっただろうから。

光司「実はですね、一昨日の夕方1枚ガラスが割れてしまいまして、昨日の時点ではまだ割れたままだったんです。これを不審でないとは言えないでしょう、ましてや学校荒らしが出没しているここ最近ではね」

教頭「……………」

教頭は遂に沈黙してしまった。と同時に光司はやはり教頭が犯人だということを確認したのだった。

教頭「……………いつから私が怪しいと思った？」

光司「制服が無くなった時、探しているあなたから不信感を覚えた時からです……………」

教頭「そうか……………残念だっ！」

万事休すと感じた教頭は、隠していた刃物を取り出し薫の後ろへ回り込んで喉元に切っ先を突き付けた。

突然の事に思わず身構える光司だったが、すぐに状況を把握して相手の出方を待った。

教頭「おっと動くなよ！……………お前はいずればれる気が

していたからな、うまく使って私の無実を印象付けたかったが……
……逆効果だったか」光司「これ以上………罪を重ねる気
ですか？」

教頭「もう………後戻りは出来ないのだよ………」

教頭は先程とはまったく違った震えた声でそう言った。そしていつ
そう薫の喉に刃物を近づける。

薫の表情は先程から恐怖で引きつっていてそろそろ限界に近かった。

そして光司はある決意をする………

光司「………フラッシュムーヴッ！」

教頭「ッ!?!?!?!?!グフッ………」

それはまさに“一瞬”の出来事だった。

光司の姿が消えたかと思うと、次の瞬間には教頭の目の前に姿を表
し水落に拳を一発喰らわせた。教頭は突然の事に抵抗する間もなく
その場で気絶した。

そう、光司は魔法を使ったのだった。

薫と言う一般人の前で………

光司「……………ふう……………」

そして、気絶した教頭から助け出した薫を支えながら少しため息をついた。

薫の方は何が起こったのか全く理解できず、ただ光司に支えられていた。

薫「えっ……………何、なにが起こったの……………」

光司「何でもありませんよ先輩。それより、早く行きましょう」

そして光司は足早にその場から薫を連れ出し、先ほどの事を一言も話すことなく自宅に送った。

かくして、ようやく学校荒らし事件は完全に解決したのだった。

三人称 side out

光司 side

事件が解決してから一夜明け、僕は今警察署に来ている。

先に言っておくと決して犯罪を犯したわけではない、昨日の学校荒らしや教頭先生の件で数人が表彰されることになったのだ。それに僕も含まれていたようでこの場にいるというわけだ。
なんだけど……………

光司「……………凜香、あの時いたっけ？」

この場には会長の薫先輩の他、優斗やジャンゴ上泉兄弟などあの時協力してくれた人たちが来ている。

確かに凜香にも協力してもらおうと思ってたけど……………あの時は休んでいたような……………？

不思議に思った僕は小声で凜香に聞いてみた。

光司「凜香……………表彰されるような事にかやったの？」

凜香「ああ、実はな……………」

凜香の話によると、昨日は面倒だったので学校をサボって町をぶらぶらしていると、不良に絡まれて逆に倒してまたぶらぶらしているとまた絡まれて……………そんな事が3回くらいあったらしい。

どれだけ絡まれるんだろう、そして絡んでいくほうも行くほうだない……………

で重要なのはここからで、夕方ごろ学校の近くを通っていると見る

からに不審者っぽい人がいたらしく、声をかけると一目散に逃げたため追いかけて捕まえたところ………これがまた別の学校荒しで下見に来ていたらしい。

凜香は運が良いというか悪いと言うか………

何はともあれこれで学校荒しが2人もつかまったと言う事で警察のほうも一安心らしい。

凜香「しかしあれだな、学校荒しもバカだよな。俺が声かけると勝手に自供しやがるんだからな」

光司「……………そう、なのかな？」

※学校荒しは凜香が女に見えたため前の学校のことかばれたと思い自供しました。実はガラスのハートの持ち主だったり……………

こうして、本当にこの学校荒し事件は青春高校の多大なる？尽力により解決しましたとさ。

チャンチャン♪

光司 side out

◇第9話「学校荒し事件!!」・後編 part 2」(後書き)

次回は特に決まっております!!

ですので、こんなのですか的なのを募集します!!
奮って、と言うかご協力お願いします

それでは!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5538t/>

紅蓮の騎士の波乱の高校生活！？

2011年8月31日20時33分発行